
京に舞う鬼

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

京に舞う鬼

【Nコード】

N3466F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夏の京都で起こる謎の猟奇連続殺人事件。警察から事件の解決を依頼された本郷と役。二人の目の前に現われる美女の正体は。ファンタジーホラーです。

第一章

京に舞う鬼

祇園祭が近づく夏の京都。この時期の京都は実に暑い。

京都はよくいい街だと言われる。だがその夏と冬を褒める者は少ない。

盆地であるこの街は気候の変遷が激しいのである。冬は凍える程寒く、そして夏はうだるように暑い。京都を彩る祇園が近づくにつれて暑さは増していくのである。

その暑い京の夏の中でその事件は起きた。とある寺の庭においてだった。

京は寺も多い。幾らあるのか見当もつかない。

中には観光で大きな収入を得ている寺もある。その寺はその中の一つだった。何でも昔狐がこの寺にいて修行をしたらしい。その後だというものがあちこちにあった。

本当に狐がこの寺にいたのかどうかはわからない。だが実際にそうしたものに残っている。そしてそれを観光にしている。そうしてこの寺は収入を得ていた。

この日も多くの観光客が訪れていた。見れば外国から来た者も多い。言うまでもないが京都は観光で生きている街である。だから外国人の観光客も多いのだ。

「こちらがかの有名な」

あちこちでガイドの声が聞こえてくる。旅行会社のガイドだけでなく寺の僧侶達もガイドにあたってている。茶色い木造の建物の中に多くの観光客達が詰めている。そして寺の中のあるあちこちを見回っていた。

左程大きな寺ではない。金閣寺や清水寺に比べるとかなり小さい。だがそんな寺でも観光客はかなりいた。そしてその狐所縁の品々を見ていたのである。

その中の一人がふと寺の中庭を見た。寺に合わせたのか小さいが形は整っている。観光客の中の一人がそこを見た時であった。

「ガイドさんガイドさん」

彼は外国から来た者であった。目は青く、髪は蜂蜜色だ。そして口髭を揺らしながら若い日本人のガイドに声をかけてきたのである。

「何でしょうか」

ガイドはそれに応えて庭にやって来た。スーツに身を包んだ若い男のガイドであった。あまりに暑いので上は半袖のカッターになっている。だがネクタイだけはきちんと締めている。

「あれですけど」

「あれ？」

それにつられて庭の中を見る。

「あれは作り物ですか？」

その観光客はわりかし流暢な日本語で彼に尋ねていた。以前にも日本にいたのだろうか少したどたどしいながらもはっきりとした言葉遣いであった。

「作り物とは」

ガイドにはその客が何を言っているのかよくわからなかった。

「何のことですか？」

「あれですよ」

観光客は庭のある場所を指差していた。

「あれは。作り物なんですか？」

「このお寺には作り物なんでないですよ」

やはり彼にはこの観光客が何を言っているのかわからなかった。

「一体何を仰ってるんですか？」

「わからないですか？」

「!？」

やはり彼には何が何なのかよくわからなかった。

「池の中に」

「池」

「浮かんでいるものですよ」

「それはお魚か何かでは？」

そう言いながら彼も庭にある池へ目をやる。品のいいよく整った池である。如何にもといった感じの和風の池である。周りは白い石で飾られ、池の水も綺麗な青緑である。周りには夏らしくスイレンが咲いている。

だが一つ妙なものがあつた。その綺麗な青緑の池の水の中に黒いものが見えるのだ。

「あれは」

「そう、あれです」

観光客は言った。

「あれは。何なのでしょう」

「はて」

それが何か一見ただけでは彼にもわからなかった。

「何なのでしょうね」

「わかりますか？」

「ここからでは。あつ」

丁度そこに寺のお坊さんが一人やってきた。

「いいところへ。あの」

「何でしょうか」

お坊さんはそれを受けてガイドと観光客に顔を向けてきた。

「あのお池ですけど」

「池がどうかしましたか？」

お坊さんはガイドの言葉に従い顔をその池へ向ける。

「何か黒いものが見えるんですけれど」

「黒いもの？」

「はい。それに」

「あつ」

観光客がまた声をあげた。

「何かまた見えてきましたよ」

「!?!」

ガイドとお坊さんはそれを聞いてまた池を見た。見れば本当にまた別のものが見えてきた。白いものが黒いもの下に見えてきたのだ。

「何ですかね、あれは」

「さて」

少し離れた場所からはわかりはしない。

「宜しければ見に行つて頂けませんか」

「はい」

この時は特に何も思うところはなかった。魚が死んだのか何かと思つた。黒いものは池の中の藻だろうかと軽く思つていた。しかしその予想は大きく裏切られることになった。

「やれやれ」

お坊さんは庭を歩きながら内心ぼやいていた。

「後で供養をしないと」

その程度にしか思つてはいなかったのだ。まだ。しかし池の中を覗き込んでまずは我が目を疑つた。

「えっ……」

池の中にあるものはそこにある筈のないものだったのだ。思わず目を剥いた。

「どうしたんですか?」

寺の方からガイドが尋ねてきた。

「何だったんですか?」

「あ、あああ……」

お坊さんは声を震わしながら後ろに二歩三歩と下がりはじめた。

「う、うわあああ……」

「!?!」

「どうしたんだろう」

そんなお坊さんの様子を見てガイドだけでなく観光客達も妙に思

いはじめた。

「何かおかしいですね」

「ええ」

彼等は口々にこう言った。そして声を震わせるお坊さんに尋ねた。

「お池に何があつたんですか？」

「そんなに驚いて。鯉か亀でも死んでいたんですか？」

「こんなことが・・・」

「こんなことつて」

彼等はそれを見て余計に不思議に思った。

「どうしたんですか、本当に」

「首が・・・」

そして尻餅をついた。

「首が」

「首!？」

寺にいた者はさらに訳がわからなくなった。

「首がどうしたんですか!？」

「どうしたも何も」

お坊さんは尻餅を着いた後で今度は池の中を指差していた。

「女の、女の子の・・・」

「女の子!？」

「何かおかしいな」

「あ、あわわわわわ・・・」

腰を抜かしたままのお坊さんを見て寺にいるガイドや観光客達も不思議に思った。そして彼等も庭に入つて来た。

「一体何が」

「あるんですか？」

最初彼等は特に変に思うことはなかった。だがそれが大きな間違이었다。彼等も池の中にあるものを見てしまったのであった。

「一体何が」

「あるんだか」

池の中を覗き込む。そこにそれがあった。

「・・・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

「こんなことが・・・・・・・・」

流石に彼等も沈黙してしまった。池の中にあるもの、それは有り得ないものだったからである。

それがゆつくりと浮かんできた。そしてそこにいた全ての者にその全てを見せたのであった。

美しい少女がいた。だがそれは首だけである。美しい、黒髪の少女の首がそこに浮かんでいた。虚ろな目をして。池の中にその白い顔と黒く長い髪、そしてその虚ろな目を漂わせていたのであった。

「で、その首には血が一滴も残っていないかったと」

京都市北区の住宅街の中にあるとある喫茶店の二階。様々なハーブティーがあることで評判のその店の二階にその探偵事務所はあった。有名なのは喫茶店の方であったがこの探偵事務所も有名と言えは有名であった。

有名なには理由があった。ここにいる二人の探偵のせいである。

第二章

一人は本郷忠。今ソファアに座って応対している若い男である。

黒く濃い髪と眉を持った精悍な顔立ちの男だ。全体的に筋肉質で武道をやっているのでは、と思わせる気配があった。白いシャツに青いジーンズといったラフな出で立ちであった。

「その通りなんだ」

彼の目の前にいるのはスーツ姿の中年の男であった。サラリーマンの様な外見だがその目だけはやけに鋭かった。

「一滴もね」

「妙な話ですね」

本郷はそれを聞いてこう感想を述べた。

「首だけなのに血が一滴もないなんて」

「それについてはどう思うかね」

「吸われたんじゃないですか？」

そして素っ気無くこう応えた。

「首は切られてたんですよね」

「うん」

スーツ姿の中年の男はそれに頷く。

「ばっさりだね。鋭利な刃物で切られたらしい」

「ばっさり」と

「そうさ。日本刀がそんなもので切られたようだ」

「そして血が一滴もなかった」

「おかしいとは思わないかね」

「問題はその血の行方ですよね」

本郷は言った。

「何処に行ったのか」

「君はどうなったと思うかね？」

「さてね」

だがその問いには肩をすくめたとぼけてみせる。

「血のソーセージという感じではないですね」

「そんなものがあるのか」

「モンゴルにはありますよ」

「初耳だな、そんな話は」

「おやおや」

「まあいい。とにかく君はその血は尋常ではない方法で消えたと思うのだね」

「一滴も残ってなかったんですよね」

「そうだ」

彼はまた答えた。

「一滴もだ。実に不思議だ」

「全くです」

「そしてそのうえで本題に入ろう」

彼は態度をあらためてこう言ってきた。

「本郷君」

「はい」

スーツの男は態度をあらためたが本郷は相変わらずの軽い態度であつた。

「それで君に頼みたいことがある」

「何でしょうか」

彼は相変わらずの軽い調子でそれに返した。

「この事件の解決に協力してもらいたい」

「仕事の依頼ですか？」

「それ以外にどう聞こえるんだね？」

男は逆にそう問い返してきた。

「それ以外に聞こえるのなら私にはもう何も言うことはないが」

「わかつてますよ、前園警部」

本郷は笑ってその中年の男の階級と氏名を呼んだ。

「どうやら普通の人間の起こした事件じゃないんですね」

「おそろくはな」
「それで俺達の事務所に来たと。わかりました」
「引き受けてくれるか」
「俺の方は構いませんけれどね。丁度今は仕事は一件もないですし」
「では」
「ところが俺一人では決められないんですよ」
彼は笑ってこう答えた。
「俺はこの所長じゃありませんから」
「では彼に連絡を取ってくれるか」
「その必要はありませんよ」
「どうしてだね？」
「役さんなら下にいますから、この時間はいつも」
「下……あ、あそこか」
そのハーブティーの有名な喫茶店のことである。警部にもすぐに
わかった。
「そういえば彼は紅茶が好きだったね」
「紅茶だけじゃありませんけどね」
本郷はそれに応えて言った。
「美味しいものには目がないんですよ」
「所謂グルメか」
「俺も味には五月蠅いですよ」
「それはどうかね」
だが警部は役に対しては懐疑的であった。
「そりやどついう意味ですか」
「君はとてもそうは見えないからね」
「嫌だなあ、そんなこと言つと」
あからさまに顔を不服そうにさせてきた。
「俺はこう見えても食べることには五月蠅いんですよ」
「それは量の方じゃないのかい？」
「うっ」

言葉が詰まった。反論出来ないのは彼自身が最もよくわかって
いた。今までの言葉はほんのはったりであったのだ。

「味と量は違うよ。特にこの京都ではね」

「そもそも一見さんお断りとか俺の性に合いませんから
言い訳になっていた。」

「違いますか？」

「つまり味には五月蠅くないということを確認るんだね」

「まあ」

ここまできたら不承不承ながら認めるしかなかった。本郷は懽然
とした顔で頷いた。

「仕方ないですね」

「また口が減らないな」

「嫌々つてやつですよ」

「そこまでして認めたくないものなのかい？別にどうということ
はないと思うが」

「京都じゃそうじゃないんでしょう？」

本郷はこう返した。

「料理の一品一品は少なくて高価、けれど素材には手間隙かけて味
は絶品」

「まあそうだけれどね」

それが京都の料理とされる。少なくとも関西の他の府県とは料理
に関する考えがかなり異なっている。とりわけ大阪のそれとは全く
違ったものとなっている。

しかも同じ京都府でも所謂ここ京都と舞鶴等ではまた違う。とか
京都は他の街とは違う異質な街なのである。それが京都なのだ。

「けれど君達みたいな若さじゃそうした店は行くこともないんじや
ないのか？」

「一見さんですからね、俺はいつも」

ふてくされた声でこう述べる。

「こんなジーンズなんか履いてちゃ入れない店ばかりで」

「まあスーツでも一見さんは同じなんだけれどね」

「嫌なことですよ。けれど役さんと一緒だと違っんですよね」

「ほう」

「殆ど顔パスです。楽に入れるんですよ」

「それは何よりじゃないか」

「けれどねえ」

だがそれでも彼は不満を顔に見せていた。

「何て言うか」

「まだ不満があるようだね」

「そうですね。だってやつと入れたと思ったら」

「うん」

「ちよびつとですよ、料理が」

「だからそうしたものなんだって」

警部はまた言った。

「ここは京都なんだから。大阪じゃないんだよ」

「ああやだやだ」

溜息混じりに言う。

「美味しいものをこうどかつと食いたいですよ、安くね」

「京都でそれは無理だね」

「ちえっ」

「また何を話しているんだい？」

ここで事務所に三人目の男の声が聞こえてきた。

「おお、来たか」

「警部さんですか」

その三人目の声は警部の声を聞いてこう述べた。

「またどうして」

「詳しいことは本郷君にもう話してあるよ」

「左様ですか」

声は事務所の入口にやって来ていた。そして気配が事務所の中に入ってきた。

「どうも」

「お邪魔しているよ」

若い男が入って来る。警部は彼に挨拶をした。

茶色の髪を中央で分けた若い男であった。顔は面長で細く切れ長の目をしている。紺色のスーツと青いカッター、そして群青が地の青とのストライプのネクタイを締めている。彼が役清明、この事務所にいるもう一人の探偵である。

「御久し振りですね」

「ああ、君も元気そうだね」

「本郷君、警部さんが来ていたのか」

「ええ、それで今依頼を受けていました」

「依頼」

それを聞いた役の顔が少し動いた。

「若しかするとそれは」

「ほう、君は察しがついたか」

「あの少女の首の事件ですね」

「そうだ。この前の寺でのな」

警部は役にこう語った。

第三章

「知っていたか」

「はい。若しかしたらここに来るかも知れないと思っていました」
「ほう」

「それが今日でしたか」

「それは予想していたかね？」

「いえ、そこまでは」

彼は応えながら部屋の中に入って来た。そして本郷の横に座る。

「そしてその事件の解決を依頼しに来られたのですね」

「うん」

警部はそれに頷いた。

「うちの本部からね」

「府警からですか」

「直々にだ。といってもここで起こる事件はいつもそうだがな」

「府警はいつもそうですね」

本郷はそれを聞いて笑ってこう言った。

「こうしたやばい事件は。いつも俺達の仕事だ」

「だがそれだからこそ君達も生きていけるんじゃないのかい？」

警部も笑って言葉を返す。

「少なくとも。損はさせていないつもりだが」

「そりゃ命かけてますから」

本郷は笑ったまままた言葉を返した。

「この仕事はマジで一歩間違えたらやばいですからね」

「そうだな」

これには警部も頷いた。

「狼男とも戦ったことがあるそうだな」

「他には吸血鬼とか悪霊とかね」

「一歩間違えたらどころではないな」

「首持ってかれますからね」

「ううむ」

「で、今度は本当に首だけだったと」

「それでその被害者は誰だったんですか？」

「地元の女子高校生だ」

「地元……ってことは」

「そう、この街の娘だ」

警部は言った。

「さる旧家の。お嬢様だったらしい」

「そうですか」

それを聞いた役の顔が暗くなった。

「まだ若いというのに」

「その若い女の子の首を切り取って血を抜いたんですね」

「どうやらな」

「人間の場合にしろそうじゃない場合にしろ。とんでもない奴です

ね、犯人は」

「だからこそ君達に頼みたい」

警部はここで強い声を出してきた。

「捜査費用もこちらで持つ。報酬とは別に」

「気前がいいですね」

「それだけ危険な仕事だからな。これもいつものことだと思っが」

「ええ」

それに役が頷いた。

「今回の事件も。また魔性を感じます」

そして静かにこう述べた。

「それならば」

「頼むぞ」

「はい。そろそろ京都は祭がはじまります」

京都で祭と言えば祇園祭である。その他の祭とは全く格が違う。特別な祭である。

「そしてそれと共に街は賑やかになり」

「人間でない連中も出て来ると。そう言いたいのだな」
「はい」

警部のその言葉に静かに応えた。

「この時期は特にね」

「まあ人間の世界でもそうだしな」

「それと同じです。あちらの世界からもやって来るのです」

「こちらは祇園祭の関係で人は割けない。申し訳ないが」

「いえ、それは構いません」

「そうか」

「私と」

「俺だけで充分ですよ。まあ任せといて下さい」

「君に言われると何か不安になるな」

「ちえっ、信用がないなあ」

「仕方ないさ。キャラクターの問題だ」

「それだけですか？」

「それ以上言うのは京都人としてのマナーに欠けるのでね」

「言わないってわけですか」

「悪く思わないでくれよ」

「って言ってるじゃないですか」

「わかっていないな。まとも口に出して言わない限り言ったことにはならないのだよ」

警部はシニカルに笑って述べた。確かにそれが京都の流儀であった。

よくぶぶづけというものが出て来る。これを食べて行け、と。この言葉は素直に受け取ってはいけない。この言葉は早く帰れという意味である。

他にも結構ある。嫌な客が早く帰るようというおまじないもある。とかく京都人というのはそうした言外に言葉を仕入れるものなのである。これが京都の流儀であった。

この警部も中々人が悪い。中々どころではないかも知れない。しかしこれも京都の流儀であった。それが本郷には少し面白くはなかった。

「何かねえ」

警部が帰った後彼は早速調査を開始した。役と二人で街に出たのである。向かう先はその首が見つかった寺である。

「俺やつぱりここに馴染めません」

「その言葉も何度目かな」

役はたまりかねたような言葉を言う本郷に対してこう返した。その表情は全く変わってはいなかった。

「そんなにこの街が合わないか？」

「夏は暑いですし」

このうだるような暑さを感じながら言った。

「冬は寒い。美味しいものは高い金を出しても一見さんじゃお断り」

「それは私というから特に困ってはいないと思うが」

「まあ食べ物に関しては」

それはとりあえずは引っ込めた。

「けれど何か」

「都人というのはそういうものさ」

彼は言った。

「特に気にすることじゃない。あの警部さんには色々とよくしてもらってもいるだろう？」

「まあ確かに」

「実際は君のことも信頼しているさ。そうでなければわざわざ仕事を頼みには来ない」

「はあ」

「そこを見切るのも都人なんだ。それが京都というものさ」

「そんなもんですかね」

「それにこの街は厭きないだろう」

「まあそうですね」

それには頷くものがあつた。

「こつした仕事も来ますし」

「そうだな。今回の仕事だが」

「やっぱりあれですかね」

本郷は言った。

「魔物でしょうか」

「可能性は高いな」

役は相変わらず表情を変えながら述べた。

「首に血が一滴もないとなると」

「ですよ。問題はその血をどうしたか」

「とりあえずはそのお寺に向かおう」

「ええ」

「それから全てがはじまる。まずはそれからだ」

「わかりました」

こつして二人はその首があつた寺に向かった。そして早速聞き込みを開始した。

第四章

「そうですか。警察の方から」

「はい」

まずは住職に挨拶をした。穏やかな雰囲気的身なりのいい僧侶であった。流石に観光客で賑わっている寺の責任者だけあり落ち着いた外見であった。

「頼まれてまして。すぐに捜査をしたいのですが」

「捜査といいますがもう私共の知ってることは皆お話ししましたよ。住職は困った顔をしてこう述べた。

「何もかも。事件があったのは」

「はい」

住職と二人は寺の中を歩きながら話をしている。そして問題の場所へ向かっていた。

「その池で。これは御存知ですよね」

そして庭に辿り着いた。住職はその池を指差した。

「娘さんの首が。浮かんでいたんですよ」

「髪の毛のことですよね」

「はい」

本郷の問いに答える。

「綺麗な娘さんでしたけど。勿体無い」

「全くです」

本郷は本当に残念そうに答えた。

「どうせなら俺が遊びたかったのに」

「おい本郷君」

役がここで言った。

「女子高生との交際は最近何かと五月蠅いぞ」

「そうなんですか」

「下手をしたらしょっぴかれる。注意しておくように」

「高校生の時はそうじゃなかったのにな」

「中学生が中学生と付き合っても、高校生が高校生と付き合っても誰も何も言わない」

言うのは学校の教師と親位である。

「大人が大人と付き合っても誰も文句は言わない。そちらにしたらどうか」

「そっちもいいですけどね」

「じゃあそれに専念し給え」

「可愛い娘ちゃんがいれば声をかけるのが男つてもんでしょ？」

「生憎私はあまりそういうことはしないがな」

「まあそういうもんです。それがねえ」

「あの」

住職は話をする二人におずおずと声をかけてきた。

「はい」

「それで捜査のことですけどね」

「そうそう。それでですね」

「はい」

「首からは。血が一滴もなかったんですよ」

「左様です」

「そして鋭い刃で切られてて」

「それも捜査でおわかりだと思えますが」

「そうですね」

「もう一つ御聞きしたいことがあるのですが」

本郷がありきたりな質問を終えると役がかわりに質問してきた。

「何でしょうか」

「その首は。どうやって持ち込まれたと思えますか？」

「どうやって、ですか」

「はい。持ち込むにはそれなりの方法が必要ですが」

この寺は壁によって囲まれている。よって中に侵入するには門を潜るか壁を越えるしかないのだ。

「それはわからないと警察は言っておられたと思いますが」

「ええ、それは承知です」

役は述べた。

「ですが。絶対に何かをしてここに入った筈です。そうでなければおかしい」

「私がそれを知っているとでも仰るのですか？」

「警察に言えない何かを」

役はここでこう住職に言った。

「感じているのではないでしょうか」

「貴方達は普通の警察の協力者ではないですね」

「いえ、只の探偵ですよ」

本郷は住職の言葉に笑って言葉を返した。

「そうでしょうか」

「ええ。それが何か？」

「いやね」

住職は流石に二人から何かを感じていた。伊達に住職を務めているわけではないようである。二人を交互に見ながら言うのであった。

「何か感じるのでですよ、いや失礼な言葉だとは存じていますが」

「何か、ですか」

「はい。決して悪いものではないですが」

「まあ俺は結構悪いかも知れませんがね」

本郷は笑ってそれに合わせてきた。

「こんな性質ですから」

「いえ、私はそうは思いません」

「ふむ」

「お二人はおそらく普通の方々ではないですね」

「さて」

役もとぼけてきた。

「少なくとも今回の事件が普通ではないとは存じておりますが」
彼は多少強引に話を事件に戻してきた。

「どうやってここに入って来たのか」

「今のところ指紋も何も見つかっていません」

「壁や庭、寺の中にもですか」

「屋根から天井裏まで調べましたが結局は」

「何もなし」

「首にもなかつたそうです。本当に何もありませんでした」

「そうですか」

それを聞いた本郷と役の目の色が少し変わった。しかしそれは住職には気付かせなかつた。

「では仕方ないですね。我々はこれで」

「何も力になれなくてすいません」

「いえ、我々も無理してお邪魔しましたしこれで」

「それじゃあまた。今度は観光客として来ますんで」

「はあ」

二人は寺を後にした。それから警察署に向かい少女に関する資料も手に入れた。そして事務所に帰ってその少女に関する資料に目を通すのであつた。二人は警部と応対したあのソファーに向かい合つて座っていた。もう外は暗くなっていたがそれに構わず資料を読んでいた。

「本当に普通の女の子だつたんですね」

本郷は資料を一通り読み終えた後でこう言った。

「何の変哲もないお金持ちの旧家のお嬢さん。交友関係も何もなかつたようで」

「悪い友人というのもしなかつたようだな」

「とりあえず資料ではこう言ってますね。それじゃあどうして、つてことですよね」

「それを調べるのが我々の仕事だな」

「そうですね。役さんは何だと思えますか？」

「何がだ？」

「あの寺ですよ。何か感じませんでしたか？」

「これを見てくれ」

彼はそれに応える形で懐から一枚の札を取り出した。

「それは」

「魔物の気配を察する札だ」

陰陽道の札の一つである。彼はこうした札を常に何枚も何十枚も持ち歩いているのである。

本郷もそれは同じだ。彼は短刀や日本刀を持ち歩いている。それを見せないようにしているのだ。

「焦げてるから何かと思いましたがよ」

見ればその札は真っ黒に焦げていた。一見では何かわからない程である。

「この反応は独特のものでね」

役は本郷にその焦げた札を見せたまま言う。

「鬼のものだ」

「鬼ですか!？」

だが本郷はその言葉には懐疑的であった。

「鬼の反応ってそんなのでしたっけ」

彼の記憶にある反応はそうではなかったのだ。

「ただ薄く黒くなるだけだったと思いますけれど」

「普通の鬼はな」

「普通の、ですか」

「どうやらこの鬼は普通の鬼ではないらしい」

「という悪霊ですか?」

本郷はそれを聞いて言った。実は鬼は一つではないのだ。様々な鬼が存在する。よく童話に出て来るような角を生やして赤

や青の肌をして虎縞の服に金棒を持つ鬼の他にも鬼婆もいる。そして他には今本郷が言った悪霊としての鬼も存在する。中国では死んだ者の霊を鬼と呼ぶのである。例えば加藤清正は朝鮮戦役において『鬼上官』と李氏朝鮮の軍隊に呼ばれていた。日本ではこれは加藤清正が鬼の如き強さを発揮してその勇猛さを敵にも讃えられたと思

つていたが実は違っていた。李氏朝鮮は中国の文化の影響が歴代の朝鮮半島の政権の中でも極めて強かった。その為彼等は加藤清正を死神の如き人物として忌み嫌っていたのである。

「いや、それとも違う」

だが役はそれも否定した。

「じゃあ何なんですか!？」

「相当な力を持つている鬼の様だが」

「相当な、ですか」

「これは気を着けた方がいい。あの寺でも証拠は何一つ残していなかった」

「ええ」

「頭も切れる。相当強力な相手だぞ」

「今わかっているのはそれだけですか」

本郷はテーブルの上に資料を置いて溜息をついた。

「しかもろくでもない話だ」

「いや、それは違うな」

しかし役は本郷の言葉も否定した。

「これも違うんですか」

「相手が強いとわかれば用心するだろう?」

「確かにそうですね」

「それがわかっただけでもいい。とにかく今回は気を引き締めていこう」

「いや、今回も、じゃないんですか?」

「今回も、か」

「はい。だって俺ここに来てからずっと楽な仕事してませんから」

「そうかな」

「何かとんでもない化け物ばかりじゃないですか。京都ってのは何かあるんですか?」

「何かないと言えば嘘になる」

役の返答は身も蓋もないものであった。

「京都は古い街だ」

「言うまでないですけどね」

「そして多くの出来事があった。貴族達の謀略があれば戦乱もあった」

それが京都の歴史であった。貴族や僧侶、僧兵、武士、商人、様々な者達がこの街において様々な陰謀や戦乱、流血沙汰に関わってきた。平安時代から幕末まで。この街はそれだけ人々の負の感情もその中に置いてきているのである。

第五章

「それで何も無いとは言えないな」

「やっぱり」

「魔物も。他の街に比べて多い」

「鬼にしる悪霊にしるですか」

百鬼夜行も夜の街、夜の京都を練り歩いてきた。魔物達の百鬼夜行もあれば怨霊達の百鬼夜行もあった。京都の街は魔物を恐れた街であり様々な退魔の処置が施されていたがそれでもその跳梁跋扈は止まらなかったのだ。

比叡山延暦寺と高野山金剛峰寺。魔物が入り出す東北と南西を護るこの二つの寺院の腐敗もそれと無縁ではなかった。内部には暗躍があり外には腐敗があった。この街はそれにより魔物が普通に出歩く街となったのである。京都の裏の世界は魔物の世界なのである。「だから。楽な仕事なぞ来る筈もない」

「厄介なことですな」

「それが京都だ」

役は突き放したように言った。

「ここにいる魔物は世界屈指の強力なものばかりだ。それはもうわかっていと思うたが」

「わからないふりをしたいんですよ。わかります？」

「わからないな」

役はまた突き放した。

「それに収入もそちらの方がいいというのに」

「確かに報酬はいいですね」

それは本郷も認めた。

「一仕事しただけで一千万単位はザラですから」

「ならわりがいいと思うが」

「これで命をかける心配さえなければ」

「それは贅沢というものだ。一回か二回やれば一年暮らしていける仕事は他にはない」

「まあね」

「だったら納得することだな。さもないと食べられなくなるどころか」

「あの世行き、ですか」

「あちらの世界にはまだ行きたくはないだろう？」

「生きたままなら別ですがね」

「では真面目に働くことだ。いいな」

「了解」

彼等はそのまま真夜中まで資料を調べ続けた。そして次の日は被害者の学校に向かった。

「何ていいいますかね」

二人はその学校の校門の前にいた。本郷はその門から見える立派な校舎を見て言った。

「無駄に立派ですね」

「そうかな」

「京都の学校は。いい校舎の学校が多いってどうか」

「そうでもないと思うが」

「けれどこんな立派な校舎の学校なんてそうはありませんよ」

見ればかなり広い校庭の中に巨大な校舎がある。それは白く、美しく彩られ、その姿を朝日の中に映し出していた。

「これじゃあまるで大学じゃないですか」

「教育に力を入れている証拠だ。いいことだ」

「お金つてのはあるところにはありますからね」

「私達はそのお金には困っていない筈だが」

「まあそうです。しかしまあ」

その立派な校舎を見てもう一度声をあげる。

「綺麗なもんですよ。よっぽどの名門校なんでしょうね」

「話はそれだけか？では行くぞ」

「了解」

何はともあれ学園の中へ入った。洒落たデザインのブレザーに身を包んだ男子生徒や可愛いミニの制服姿の女子生徒達が二人の横を通り過ぎていく。

「懐かしいなあ」

本郷はそんな学生達を見て目を細めた。

「俺も少し前まではこうして毎朝学校に通っていたんだっけな」

「いい思い出だったみたいだな」

「成績は悪かったですけどね」

二人は校庭を歩きながら話をしていた。

「大学にはスポーツ推薦で入りましたから」

「そつえばそうか」

「大学では成績はよかったですけれどね」

「大学では講義に出ているだけで単位はくれるからな」

「あつ、わかってましたか」

「それ位知っているさ。日本の大学のことはな」

「きついお言葉」

「だがそれは別に悪いことじゃない」

「はあ」

この言葉は少し意外だった。ここでてつきり学生批判や大学批判をするのかと思ったからである。

「人間学ぶべきことは一つだけではない」

役は言う。

「大学で学ぶこともまた一つではないのだ」

「そついうことですか」

「そつだ。だから別にそれは悪いことじゃない」

「成程」

「君にしる大学で学んだことは多いだろう？」

「それで今こうやって探偵やってるわけですからね」

本郷は少し上へ目線をやりながら述べた。

「剣道やら手裏剣やらやったおかげで」

「手裏剣か」

「意外ですか？」

「今やってる人間は少ないからな。それは大学で覚えたのか」

「他にも色々覚えましたがね」

「酒や煙草か？」

「いえ、それは高校の時に」

「そうか」

学校で話すべきことではないが役はそれには構わなかった。周りの学生達も彼等の話は聞いていない。

「体術もね。本格的に身に着けたのは大学からですし」

「そして魔と戦う力にも目覚めたのだな」

「そうですね。色々身体を苛めているうちに」

「魔物と戦う流儀は一つではない」

役は述べた。

「身体を使ったものもある」

「俺はどっちかという肉体派ですからね」

「そうだな。君はそれでいい」

「はい」

「私も私で流儀があるしな」

「ええ」

「それについては構わない。黒魔術でも白魔術でもな」

「魔物を倒せれば」

「そういうことだ。君にしろ体術だけではないしな」

「それだけでやっていける世界じゃないですしね」

「うむ」

「まあ俺も色々勉強してますからね、これも」

「いいことだ。それだけ生きられる時間が長くなる」

「生きられる、ですか。嫌な言葉ですね」

「人は何時か死ぬ」

役はクールに述べた。

「だったら畳の上で死にたいだろう」

「確かに」

「そういうことだ。では中に入ろう」

「はい」

校舎の前に着いた。そしてその校舎の中に入る。

校舎の中も綺麗であった。ただ校舎が綺麗なのではなく掃除も行き届いていた。

「ふむ」

役はゴミ一つない廊下やシミがよく拭き取られた壁、透き通った窓等を見て声をあげた。

「いい学校だな」

「わかるんですか？」

「綺麗だからな」

「いえ、それさつき俺が言いましたけど」

「そういう意味じゃない」

「そうなんですか」

「わからないか。この綺麗な校舎の中が」

「ええと」

そう言われた本郷はあらためて校舎を眺めた。

「ゴミ一つないですね」

「そういうことだ」

役は言った。

「綺麗だな」

「俺の学校とは大違いですね」

「君の学生時代はかなりワイルドなものだったようだな」

「まあおしとやかじゃなかったですね」

「ふむ」

「こんな綺麗に掃除なんてしていないですし。いい加減なものでしたよ」

「こつしたところに学校の品性が出るからな」

「それじゃあこの学校はかなり上品なんですね」

「そう思う。それでは行くか」

「はい」

二人はそのまま校舎の中を進んでいった。そして学園の校長と話をすることになった。

「あの娘について、ですか」

校長は穏やかな風貌の初老の紳士だった。特におかしなところは見られない。

「探偵さん達でしたよね」

「はい」

本郷がそれに答えた。

「警察に捜査の協力を依頼されました」

実際には高額で解決を依頼されたのだがそれは言わない。

「それで来ました」

「左様ですか」

校長はそこまで聞いてまずは頷いた。

「ここまでおいで頂いたことは有難いのですが」

「お話することはないと」

「申し訳ないですが」

校長は本当に申し訳なさそうに述べた。そこから彼が少なくとも不誠実な人物ではないのはわかった。

「警察にお話した通りです。至って真面目でよい娘でした」

「そうですね」

「私共は何も。部活動も熱心でしたし」

「部活動!？」

「はい、華道部です」

彼は言った。

第六章

「ああした旧家の娘さんがよく習うものです。幼い頃からやっていたといえます」

「そうだったのですか」

「他にも茶道や香道も。嗜みとして」

「ふむ」

役はそれを聞いて小さく頷いていた。

「部活動の他にも先生について学んでいたそうですが」

「残念なことですね」

「はい」

無念そうに頷いていた。

「私共も知っているのはこれだけです。後は」

「はい、それでしたら」

本郷も役もそれ以上聞こうとはしなかった。

「我々からは何も」

「すいません」

「いえ、いいですよ」

そう言って校長を慰める。そして学園を後にした。

「ここからは情報は得られませんでしたね」

「まあ予想はしていたが」

二人はそんな話をして学園から離れていた。

「で、これからどうします?」

「どうするとは?」

「被害者の家に行って家族からも話を聞きますか?」

「それも何だな」

役はそれをするつもりはなかった。

「今言ってもおそらく取り乱しているだろう」

「警察の資料によるとかなり錯乱していたそうですね」

「実の娘があんな無残な姿になったのだ。無理はない」

役の声には特に感情はみられなかったがそれは決してよいものではなかった。

「特に可愛がつていればな。そうなる」

「そうですね。俺はまだ結婚もしてないけどそれはわかります」

「そうだろう。だからここは行かない方がいいな」

「ええ」

「ただ、さっき気になることを聞いたな」

「何です？」

「部活だ」

役は言った。

「華道部に入っていたと」

「ええ。けれどそれだけではこれといっては」

「他には茶道や香道も」

「旧家では普通ですよ」

「確かに。だがそれだけじゃない」

彼は言った。

「ここに何かヒントがあるかも知れない」

「そうですね」

「とりあえずもう一度事務所に戻ろう」

「もうですか？」

「そうだ。もう一度資料を読みなおす。いいな」

「わかりました」

こうして二人は事務所に戻った。そしてクローラーを利かした部屋で二人向かい合って資料をまた読んでいた。

役は下の喫茶店から持って来てもらったハーブティーを飲んでいく。今度はローズだ。

「相変わらず好きですね」

「ハーブティーは奥が深くてね」

彼はそのティーをすすりながら答えた。

「多くの種類があるしその一つ一つがその時で味が違う」
「はあ」

「そこがいいのだ。そして名人が入れたものだ」と

「味も絶品なのですね」

「そうだ。よくわかったな」

「いつも聞かされてますから」

本郷は資料を読みながら苦笑いを浮かべた。

「同じ茶でもこっちはまた違うんですね」

「西洋では茶道はない」

これはもう言うまでもないことだ。

「だが楽しむことはある」

「そのハーブティーにしるですね」

「そうだ。中国にもな」

茶と言えば中国である。だからこれは言うまでもない。

「しかしそれを道にしたのは日本だけだ」

「日本だけ」

役の言葉が前を見据えたものになったのを見て本郷も目をあげた。

「そう。そして彼女はそれについても師匠がいた」

「そこに何かありますか？」

「さてな」

しかしこれには答えなかった。本郷はその言葉を聞いて心の中で
拍子抜けを覚えた。

「確かなものはな。まだわからない」

「そうですか」

「だが彼女が華道等を嗜んでいるのはわかった」

「と言ってもそれだけですよ」

「しかしここから事件が解決することも多いな」

「まあそうですけれど」

「じっくり読んでいこう。今はそうして知識を蓄えて細かい部分を
調べるべきだ」

「わかりました」

「ただな」

「ただ。何ですか？」

「どうにも引つ掛かるな」

役は資料を読みながらこう呟いた。

「！？何かあるんですか？」

「その華道や茶道のことだ」

「そこはもう」

「師匠を。あたってみる必要があるな」

「けれどそんな旧家の習い事のお師匠さんなんて変な人いないですよっ？」

「表向きはな」

役は一瞬横を見た。

「実際の顔はどんなものかは誰にもわかりはしない」

「まあそうですね」

本郷にもそれはわかる。こうした仕事をしていると自然にわかってくるのだ。

「それじゃあ明日からはそっちも調べてみますか」

「そうだな」

「鬼が出るか蛇が出るか」

「今一番可能性があるのは」

「鬼、ですね」

「そうだ。札が教えてくれた」

そこで懐から札を出した。もうあの黒く焦げた札ではないが。

「だが気をつけた方がいいな」

「札が焦げた件ですか」

「あんな強力な妖気は今までそうそう察したことはない」

「そんなに」

「これは。酒吞童子に匹敵するかもな」

「驚かさないで下さいよ」

本郷はそれを聞いて思わず笑ってしまった。

「あの鬼に匹敵だなんて。魔王じゃないですか」

「そう、魔王かもな」

「魔王って」

酒吞童子は平安時代に現われたという恐るべき鬼である。言い伝えに残っている鬼の中では桃太郎と戦った温羅に匹敵する強力な鬼である。五色に輝く巨大な身体と無数の目を持っていた。そしてその圧倒的な魔力と腕力によって京の都を脅かしていたのだ。

それに匹敵する力の持ち主ともなれば。確かに魔王であった。

「それだけに見つけ辛いかもな」

力の強力な者はそれだけ己の力を知っている。それを隠す術も知っているということなのだ。

第七章

「尻尾を掴む時点で厄介になるってことですね」

「そしてそれを掴んでからも」

「まあやってやりましょうよ」

「気合が入ったかな」

「ええ、ようやくね。明日からガンガンいきますよ」

「そうか、では期待している」

「役はそれを聞いてすつと笑った。」

「明日から私は暇になればいいな」

「そうなったことってありましたっけ」

「残念だがない」

「今度は苦笑いになった。」

「ましてや魔王が相手ならばな。暇になるとは思えないな」

「だったら二人で真夏の京都巡りといきますか」

「暑いだけだな」

役のぼやきが最後の言葉になった。二人はこうして真夏の京都を歩き回ることになった。

夏の京都は暑い。本郷はタオルで顔を拭きながら炎天下の街を役と二人で歩いていた。

「暑いですね」

「そうだな」

汗だくの本郷に比べて役は表情が変わっていない。涼しい顔である。

「本当ですか？」

「うん」

「応えはするがやはり同じである。」

「暑くて困る」

「あまりそうは見えませんが」

本郷が言つと説得力があつた。彼は今もタオルで顔を拭いているのだ。

「これでも参つてはいる」

「つて汗かいていないじゃないですか」

「これは体質なんだ」

「本当ですか!？」

汗かきの本郷には信じられない言葉だつた。

「そつだ、体質だ」

「はあ」

見たところあまりそつは思えない。流石にコートこそは着てはいないがスーツを着ていてそれは説得力がないように思えたからだ。

「私は殆ど汗をかかない体質なんだ」

「何ですか?」

「まあそこは色々とあつてな」

だがその答えはぼかしてきた。

「氷の剣を使つているせいかな」

「羨ましいですね」

「君も水の術を使えるだろう?」

「おつと、そつでした」

言われてようやく気付いた。

「それを使えば多少は涼しくなると思つが」

「そつですね。それじゃあ」

本郷は術を使った。

隠し持つている刀や短刀等に氷を貼る。すると急に涼しくなってきた。

「ふつ」

「ただし、塩には気をつけるんだ」

「ええ、わかつてますよ」

氷に塩が付くと急激に気温が低下する。それだとかえつて身体に悪いのである。二人はそれについて言っているのだ。

「何事も程々にね」

「うむ」

「ところでですね」

本郷はさらに話を続けた。

「どうした」

「その華道と茶道と香道の師匠って一緒なんですよね」

被害者の話に移ってきていた。

「ああ、そうだな」

そして役もそれに頷いた。

「そちらの世界じゃかなり高名な人らしい」

「名前は何ていいましたっけ」

「忘れたのか？」

「すいません、そこまでは見ていなくて」

「仕方ないな。まあいい」

だが役はそれは不問に付した。

「もうすぐそこに着くからな」

「さぞかしでつかい家なんでしょうね」

二人は今祇園を歩いていて。舞妓さん達がいる場所でもある。

「こんなところに家があるってんですから」

古い町並みである。左右に木造の家や屋敷が立ち並んでいる。そしてその横を和服を着た女性達が歩いている。彼女達はその舞妓さんである。昼は流石に化粧もあぁいったみらびやかな服も着てはいない。

この古い場所に住んでいるのはやはり古い人達である。本郷や役の様に北に住んでいる人間を余所者と認識する程の古い人達である。本郷はふとそれを思った。

そしてその中にある屋敷の一つの前に来た。見れば古風でかなり趣きのある門であった。

「ここですね」

「そうだな」

二人はその門の前に立つた。そして入り口を見た。名前は竜華院という。かなりものものしい名前だ。

「如何にも京都って感じの名前ですね」

本郷はその名刺を見て言った。

「じゃあ入りますか」

「ああ」

「お待ち下さい」

だがここで家の方から声がした。

「!？」

二人はその声に気付き顔を声がした方に向けた。見ればそこには一人の妙齡の美女がいた。

黒い髪を上で束ね、そして細くやや吊り上った目を持っている。

その目の光は鋭く、何もかも射抜くようであった。

姿勢はよくスラリとしていた。そして立ち居振る舞いも落ち着いており気品を感じさせるものであった。着ているのは絹の和服であり淡い赤の光沢と花の模様で飾られていた。日本の古きよき香りのする、そんな美女であった。

「貴女は」

「この家の主でございます」

美女は落ち着いた気品のある高い声で言った。その声は実に張りがあるものだった。

「竜華院貴子と申します」

「竜華院さんですね」

「はい」

その美女は本郷の言葉に頷いた。

「実は御聞きしたいことがあります」

「わかりました。ではこちらでは何ですから」

そう言っつて屋敷の方に顔を向ける。見れば古風な、門と同じく趣きのある屋敷であった。木造でしかもかなり大きい。見れば檜で作られていた。

「中で。お話しませんか」

「宜しければ」

役がそれに応えた。

「わかりました。それでは」

「はい」

こうして本郷と役は竜華院の屋敷に入った。そしてその中にある茶室に案内された。

屋敷の中は実に広がった。廊下も檜であり途方もなく長い。二人はその木の廊下を貴子に案内されながら進んだ。

その左右には庭や部屋の入り口、そして襖が見える。襖も美しい絵が描かれ、庭は緑と水で覆われている。かつては日本にも多くあった奥ゆかしい屋敷であった。

「こちらです」

貴子は狭い入り口の前で立ち止まった。

それは茶室の入り口だった。そこで話をしようというのだ。

「お茶をお入れ致しますので」

「申し訳ないです」

「それでは」

「はい」

まずは本郷、そして役が入った。最後に貴子が。三人は茶を飲みながら話をする事になった。

「!？」

二人は茶室に入ると肌で違和感を感じた。だがそれよりも先に貴子に案内されてそれは胸の中にしまいこむことになったのであった。茶室の中は簡素であった。それまでも奥ゆかしさよりも茶室そのものといった感じであった。静かで、そこには所謂侘び寂びといったものがあつた。京都の伝統的な落ち着いた茶室であつた。

「表でしょうか裏でしょうか」

役はその部屋の中に正座すると貴子にそう問うた。

「表ですが」

「そうですか」

この場合は表千家か裏千家かという意味である。茶道の世界はその二つの勢力が大きいのである。

「それではどうぞ」

「はい」

二人は貴子が入れたお茶を飲んだ。作法に従いゆっくりと飲む。

「それではお話のことですね」

「はい」

二人はまず茶を置いてからそれに応えた。

「実は」

役が口を開いた。

「この前ある寺で事件がありました」

「はい」

「その事件のことは。御存知でしょうか」

「勿論です」

貴子は二人と正対した。そしてそれに応えた。

第八章

綺麗な正座であった。背筋は伸び、顔まで凜とした気配が漂っていた。その顔を見据えながら二人は貴子と対していたのである。

「それなら話は早い」

本郷が言った。

「貴女は。被害者の華道や茶道の師匠だったのですね」

「はい」

貴子はその問いに頷いた。

「その通りです。他には香道も教えさせてもらっていました」

「そうだったのですか」

本郷はそれを聞いて頷いた。

「残念なことです」

「いえ、お気遣いなく」

貴子はそう言って本郷を逆に気遣った。

「もう落ち着きましたから」

「そうですか」

「それで事件を調べられているのですね」

「はい」

また本郷が答えた。

「俺達は探偵でして。警察に協力を要請されました」

「何か御存知のことがあれば。お話して頂けませんか」

「と言われなくても」

だが出て来た言葉はつれないものであった。

「私が知っていることは。何もありません」

「そうですか」

「花とこのお茶と。そして香りのことだけです」

「香り」

それを聞いた役の目が微かに動いた。

「そういえばこの香りは」
「何かあるんですか？」
「あるとも。この香りは」
「お気付きになられたようですね」
貴子はそれを聞いて役に顔を向けてきた。
「はい。これは花ですね」
「はい」
貴子は頷いた。
「それを香りにした。これはあやめです」
「その通りです」
「あやめの香りって？」
「君にはわからないか」
「何も香りませんけれど、俺には」
「これが香道というものだ」
役は本郷にこう述べた。
「あの、本当に何も香らないんですけれど」
「まあこれは微かにだからな」
「全然じゃなくて」
「それを香り、知るのもまた香道だ。これはそういうものなのだ」
「よく御存知ですね」
「この街にいて長くになりますから」
役はそう貴子に返した。
「自然と覚えてしまいました」
「それは素晴らしい」
「いえ、そのような」
とりあえずここは謙遜した。
「では他の香りもおわかりですね」
「あれっ、他の香りもあつたんですか？」
「そうだ。この屋敷全体にな。複雑に入り混じっている」
「へえ、何かややこしいですね」

本郷はこうしたことには弱かった。ただ感嘆の言葉を漏らすだけであった。

「俺には全然わかりませんけれど」

「あやめの他には五月」

役は香りを感じながら述べる。

「すみれに百合。そしてこれは」

「最後は。おわかりですか」

「これは……蘭ですか」

「はい」

貴子はここまで聞いたところでにこりと微笑んできた。気品のあふる笑みだがそこに何か隠れているような笑みでもあった。変わった、複雑な笑みだった。

「よくおわかりになりましたね」

「あまりにも微かなものだったので」

役は答えた。

「少しわかるのに手間取りました。しかし蘭とは」

「四季の花を揃えておりますので」

「四季の」

「はい。この京都の四季は実に鮮やかです」

貴子は述べた。

「それを。常に味わっていたと思います」

「それについてはこういった考えもありますね」

「それは」

「四季は。移ろうからこそいいと。その季節にはその季節の花が、そして香りがあるのだと」

「確かにそうした考えは根強いですね。特にこの京都は」

「はい」

「私も。よく言われます。常に四季の香りがするのはそぐわしくないと。道というものがわかっていないと」

「私はそこまで言うつもりはありませんが」

「それはわかっております。ただ、そう言われることが多いというだけで」

「左様ですか」

「私には私の考えがあるのですが」

「美しいものはそのまま、永遠にと御考えでしょうか」

「否定はしません」

それが彼女の考えであった。

「美しさが留められるのなら。よいとは思いませんか？」

貴子は真剣な顔で二人、いや役に問うてきた。

「その為には。他のものがどうなるかと」

「厳しいですね」

役はまずはそれを否定はしなかった。まずはこう返しただけである。

「構わないのです。違いますか」

「それが道であると」

「そうです」

声に陰しさが漂ってきた。

「美はこの世で最も素晴らしいもの。それが衰えていくことは我慢なりません」

「それだけですか？」

役も真摯な顔になっていた。その鋭くなった目で貴子を見据えていた。今二人は茶室において対峙していた。何時しか事件の話はなくなってしまうていた。

「それだけとは」

「貴女はこの屋敷にその香りを含ませている。そこにも何かがあるのではないのでしょうか」

「その何かとは」

「美しいものは側に置きたくなるもの」

役は言った。

「それも。あるのではないですか？」

「おわかりですか」

「まあこれは個人としての心情ですね」

「それもあります。確かに私は美しいものは全て側に置きたいと考えます」

そして貴子もそれを認めてこう述べた。

「それができなければ」

「できなければ」

「私の中に。そして飾ります」

「飾る」

「道の一つとして。飾ります」

「成程、それが貴女の道なのですね」

「はい」

役の問いにこくりと頷いた。肯定の証であった。

「私の道は。永遠を目指します」

その身体に炎が宿った。全てを燃やし尽くし、犠牲にするような強い決意の炎であった。

「そして。その為には」

「その為には」

「鬼になりましょう」

そう、その炎はまさに鬼の炎であった。赤い紅蓮の炎が生物の様に貴子の身体の周りを覆い、燃え盛っていた。

「左様ですか」

「はい」

そしてそのうえで役の言葉に頷いた。

「わかりました。貴女の道に対する御考えは」

「有り難うございます」

「私の考えとは違いますが。それもまた一つの道です」

役はそれまでの見据える様な強い光を消していた。そして知的な物腰で貴子にそう述べたのであった。

第九章

「貴女には貴女の道があり、私には私の道がある」
そしてまた述べた。

「それだけです。それを否定することは誰にも出来ない」
他人の考えや世界には入らない、これが役の考えである。今彼は
その己の考えに忠実に従っているだけであつたのだ。

「それで宜しいでしょうか」

「おわかり頂き有り難うございます」

「さて、それでは」

役はここで言つた。

「お話も終わりましたし。これで」

「何もお話できず。申し訳ありません」

「いえ、宜しいですよ。御存知ないことは仕方ありませんから」
役はそう言つて貴子を宥めた。

「それではこれで。失礼しました」

「はい。では門までお送りします」

「あつ、これはどうも」

こうして二人は門まで送られることになつた。そしてまた広い屋敷の廊下を通つて出口に向かつた。そして玄関で靴を履いて門に出たのであつた。

「今日はお疲れ様でした」

「いえ、お茶までご馳走になりました」

二人は貴子にそう応えた。

「お邪魔しました」

「また何かあればおいで下さい」

「はい」

その言葉に素直に頷いた。

「ではこれで」

「ご機嫌よう」

こうして二人は貴子の屋敷を後にした。そしてその後で蕎麦屋に入り昼食を採るのであった。

本郷はざるそば、役はソーメンを注文した。二人はそのまま麺を露につけて口に入れる。

喉越しを心地よい麺の感覚が通る。二人はそれを一口味わったあとで口を開いた。

「何か話が進みませんね」

「まだ捜査ははじまつたばかりだ」

役は不平を漏らす本郷に対して言葉を返した。

「今の時点で言っても仕方ないと思うが」

「それはまあそうですが」

「これからだ。そう焦ることはない」

「そうですね。ところであの竜華院さんですけど」

「どうした」

「綺麗な人でしたね」

「そうだな」

頷きはしたが素っ気無いものであった。

「けれど。何かあまり悲しそうじゃなかったですね」

「悲しそうではない、か」

「そうですね。お弟子さんがあんな死に方をしたのに表情を変えないで」

「確かにな」

役はそれを聞いてふと思うことがあった。

「あまりにも表情がない」

「はい」

本郷は返事をした後でそばを啜った。勢いよい音が店の中に響く。勢いよくそばを啜る本郷に対して役のそれは落ち着いたものであった。穏やかな様子でそうめんを口に入れていた。

「そして道にやけに厳しかったな」

「鬼になろうとも、なんて言っていましたよね」
「そうだったな」

役もそうめんを口に入れた。

「引っ掛かるんですよね」

「美人なのにか」

「美人は美人でもね、普通にある美人じゃないんですよ」

本郷は言った。

「人形みたいって言いますかね、感情が見られない」
「ふむ」

「役さんはどう思いましたか？」

「それは私も同じだ」

役はそうめんを一口嚙り終えた後で述べた。

「人間味は感じなかったな」

「やっぱりそうですか」

「だが妖気は感じられなかった」

「それは俺もですね」

「見てくれ」

役はここで懐を開いた。

そして懐から札を取り出した。見れば綺麗な白であった。

「札には変化はない」

「ですね」

「どうやら。彼女は妖かしの類ではないようだ」

「だったら何ですかね」

「人なのだとは思う」

そして答えた。

「だが。非常に冷たい感じがするな」

「そういえばあの茶室全然暑くなかったですね」

「屋敷もな」

「ですね。夏だっていうのに」

「しかもクーラーの寒さではなかった」

「何かこう」

本郷は感触を思い出しながら言った。

「自然に出ているものですよね」

「自然にな」

「屋敷全体が。少なくとも夏は感じなかったですね」

うだるような京都の夏の中において貴子の屋敷だけが涼しかったのだ。夏ではないように。そこが二人には非常に奇妙に感じられたのだ。

「秋、いや初冬に近い程だったな」

「ええ」

「この暑い夏の京都でな」

おかげで夏休みに入ると学生達はほぼ一斉に郷里に帰ってしまう。残る者もいるにはいるが少数だ。皆この京都の夏が耐えられないのだ。

「これは。どういうことかな」

「涼をとっているってわけじゃないですよね」

「それにしても限度がある」

「はい」

「あの感じはな、異様だった」

「どういうことでしょうかね」

クーラーを効かしてあるこの店の中ですら暑いのだ。それなのにクーラーも見当たらなかったあの広い屋敷全体が異様なまでの寒さと言えるものまであった。これは一体何であったのか。

「あの人も調べますか？」

「待て」

役ははやるうとする本郷を制止した。

「それは」

「しないんですか」

「おそらく彼女は人間だ」

「それはわかりますけれどね」

「札の気配は鬼のものだった」

「それじゃああの人は違うんですね」

「人だからな」

役は言った。

「だが。人が鬼になる場合もある」

「そうですね」

二人は以前そうした鬼と戦ったことがある。鬼は鬼からのみ生まれるのではないのだ。人が鬼になる場合もある。生きている場合も死ぬ場合も。成り得るのだ。

第十章

「けれど札は焦げませんでしたよね」

「ああ」

「だったら。あの屋敷がたまたまであの人もそういう単に厳しいって
いるだけだったんですかね」

「そうだろうな」

「だったらまた犯人は別ですね」

「しかし鬼はこの京都にいる」

「京都に」

「間違いない、これだけは」

役の目と顔が剣呑なものも含んだ。

「この街の何処かにいる」

「鬼がですね」

「必ず見つけ出すぞ」

「ええ」

「そして倒す。いいな」

「わかってますよ」

本郷は真剣な顔のままざるそばを啜った。見ればもう綺麗に食べ
てしまっていた。

「おばちゃん」

それを見て店のおばちゃんに声をかける。

「ざるそばもう一杯」

「あいよ」

「食欲は健在みたいだな」

「安心しました？」

本郷はニヤリと笑って役に返した。

「君に食欲があるうちはな。大丈夫か」

「それはまたどうも」

「しかしざるそばだから別にいいな」

「これはカロリーが殆どないですからね」

そばはうどんに比べてカロリーがかなり低い。また腹持ちもうどんの方が上だ。だが味は決してうどんに劣ってはいない。うどんにはうどんの、そばにはそばの良さがあるのだ。

「幾ら食べても大丈夫ですね」

「問題は夏バテだが」

「それなら鰻をいけますか」

「それを言つと三河町の半七だな」

「けれど酒は好きですよ」

「だからなお悪い」

「祭までには終わらせて祭の間は酒と洒落込みたいですね」

「では働こうか」

「やっぱりそうなりますか」

こんな話をしながら昼食を終えた。今度は警部のいる署に向かった。

「丁度いいところに来たな」

警部は二人を見ていきなりこう言った。

「何かあつたんですか？」

「この口ぶりからすぐにわかると思うが」

「また事件ですか」

「そうだ、今度は橋でだ」

「橋」

「三条の方だ。すぐに行くぞ」

「行くぞつて警部もですか」

「当然だ。これは私の仕事でもあるからな」

警部は事務所に来た時とはうって変わって真摯な顔になっていた。

「行かなければどうしようもない」

「それでどの橋ですか？」

「三条小橋だ」

警部は役に答えた。

「あそのこの下だ。では行くのか」

「はい」

「一息つく暇もないですね」

本郷の不満をよそに彼等は三条小橋に向かった。橋の下に着くとそこにはもう人だかりが出来ていた。

「これはまた」

「何ちゅうむごい」

京都弁の声が聞こえる。本郷と役は警部と共にその人だかりを越えて現場にやって来た。

「あつ、これは警部」

制服を着た警官の一人が彼に気付き敬礼をする。

「被害者は何処だ」

「あれです」

「あれか………うつ」

警部はその制服の警官が指差した方を見て思わず絶句した。

そこには全裸の美しい少女がいた。その腹は縦に切り裂かれ傷口から紅い血が出ている。黒く長い髪まで血に染まり、それが白い、いや青くなつた身体にへばりついている。両手を上にして縛られて吊り下げられておりその顔にも最早生氣はなく、虚ろに下を見ているだけであつた。あまりにも惨い屍であつた。

「役さん」

「ああ」

役は本郷の言葉に頷き懐からあの札を取り出した。見ればそれはあの時と同じで完全に焦げてしまっていた。

「間違いないな」

「やはり」

「あの寺の事件と同じ犯人だな」

「間違いないかと」

役は警部にもそう答えた。

「そしてこれは」

「わかっている」

警部はそれ以上聞かなくとも彼の言いたいことはわかっていた。

「それにしても惨いことをする」

警部も顔を顰めさせていた。

「ここまでですとは。犯人はかなり悪趣味な輩の様だな」

それが本当に犯「人」であったならばだ。そうでないことは警部も承知している。だからこそあえてこんな表現を使ったのである。事情は複雑だ。

「そうですね」

二人もそれに同意した。

「ごうした輩は。時折います」

「この日本にもね」

「まずは死体を回収するか」

このまま遺体を橋から吊り下げているわけにはいかなかった。警部はすぐに判断を下した。

「とりあえず君達は現場の捜査に協力してくれ」

「はい」

二人は警部の言葉に従った。

「遺体はこちらで調べておく。現場での捜査が終わったらこっちに来て欲しい」

「わかりました。では後で」

「うむ」

遺体が回収され警部は部下を連れて署に戻った。そして本郷と役は残った警官達と共に現場の捜査にあたるのであった。

二人は警官達に劣らない動きで捜査を行っていた。どうやらかなり慣れているようである。

その中であつた。役はあることに気付いた。

「役さん」

「どつした」

そして役に声をかける。役の方もそれに顔を向けた。

「血が。全然ないですね」

「血が、か」

「はい。あの遺体は腹を縦に切られてましたよね」

「ああ」

確かにそうであった。切られた腹は紅い血で染まっていた。

「けれど現場には。血が一滴もないです」

「一滴もか」

「見て下さいよ、この川辺」

そして川辺を手で指し示す。

「綺麗なものですよね。それに橋も」

「うん」

「血なんて全然ありません。あんなに派手に切ってるのにね」

「あらかじめ死体の血を抜いていたのか」

「最初の事件と同じですよね」

そしてこう言った。

「血がないってというのは」

「知ってると思うが」

役はここで本郷に顔を向けてきた。

「日本にも吸血鬼はいる」

「はい」

これは本当のことである。飛頭蛮という中国から渡ってきたとされる妖怪がいる。ろくろ首の一種とも言われるこの妖怪は日中は普通に暮らしているが夜になると首が身体から抜け出して勝手に動く。そして人を襲いその血を吸うのである。ただ中国の飛頭蛮は南方の民族であるともされ特に危害を加えないという話もある。若しかするとこのろくろ首の一種は日本独自の妖怪であるかも知れない。

第十一章

これを本郷が知らない筈がない。そうした妖怪達を倒すのを生業としていのであるから。だがこの時は少し事情が違っていたのである。

「けれどですね」

彼の方でもそれを言ってきた。

「あのろくろ首ってこんなに鋭い刃物、使いましたっけ」

「聞いたことはない」

「ですよ。それで札のことを考えると」

「やはり鬼の仕業だな」

「そうですね。それも間違いなく同じ鬼だ」

「美しい少女ばかり狙う鬼か」

「一体何者なのか。まあ碌でもない奴なのは確かですね」

「まあそうだな」

「そもそも人間でもないですし」

「それを言ったら御仕舞いだかな」

「おっと、これは失敬」

「しかしだ」

役も顔を顰めさせていた。

「寺でのことといいこの橋でのことといい」

「どうやらかなり悪趣味な奴みたいですね」

二人はそんな話をしながら現場を調べ続けていた。やはり血は殆どなく、証拠らしきものはその鬼の気配以外何もなかった。結局何もわからないのと同じであった。

捜査を終えて署に戻る。するとやはり警部が声をかけてきた。二

人はすぐに個室に案内された。そしてそこで警部から話を受けた。

「被害者のことで色々とわかったよ」

「身元等もですか？」

「ああ。今度は大学生だった」
「大学生ですか」
「地元の学校に通う、な。そしてやはり良家のお嬢様だった」
「またしても、ですか」
「そしてこれも同じだな」
「お茶やお花をやっていたんですね」
「もうわかっているか」
「何となく勘で。正解でしたか」
「その通りだ。そのものズバリだ」
「こりゃどうも」

本郷は正解とされて本来なら笑うところだがそうはしなかった。こんな事件の現場を見た後ではとてもそんなことは出来なかったからである。そうした心も心配りも彼は彼なりにわきまえていた。

「そして踊りもな」
「踊りも、ですか」
「日本舞踊だ。これは違ったと思うが」
「どちらにしる日本的な物ですね」
「そうだな。そしてもう一つ面白いことがあった」
「それは何ですか？」
「若しかして血のことでしょうか」
「今度は役が尋ねた。」
「血か」

「違いますか？」
「よく気付いたな、確かにそれもある」
「それもあるとは」
「今回は別のことだ」
「一体何なんですか？」
「被害者の腕に巻き付けられていたものだ」
「被害者の！？ああ、あれですね」

本郷はそれを聞いてふと思いついた。被害者の遺体を橋から吊り

下げていたあの紐だ。

「あれがどうかしたんですか？」

「あれは只の紐ではなかった」

「只の」

「そう、藤の蔓だった。どうだ、変わっているだろう」

「変わってるも何もまたえらく妙な話ですね」

本郷はそれを聞いて顔を露骨に歪ませた。

「藤の蔓で被害者を吊るし上げるなんて。よくそんなことが出来ま
す」

「そしてその蔓には紫の花が咲いていた」

「花が」

「そうだ、これはどういうことかな」

「明らかに季節外れですが」

「何か思うところはないかね」

「その蔓の事ですが」

「うむ」

まずは役が尋ねてきた。警部はそれに応える。

「取調べはされましたか？」

「それは今行っているところだ」

「左様ですか」

「その判定次第でさらに面白いことになるだろうな」

「その蔓、拝見させて頂けるでしょうか」

「蔓をか」

「はい。宜しければお願いします」

「わかった。ではこっちに来てくれ」

「はい」

二人は警部について署内の地下に向かった。暗い階段を三人で降りていく。

カッシーーン、カッシーーンという靴の音が響く。固いコンクリートを一段一段三人で降りていく。

「ところで血のことですけれど」

本郷は階段を降りながら警部に声をかけてきた。

「それか」

「被害者の遺体には殆ど残っていないかったですでしょう」

「その通りだ」

彼は本郷の言葉に頷いた。

「やっぱりそうですか」

「殆ど抜き取られていたな。見事なものだ」

「どうやって抜き取ったかとかはわかりますか？」

「傷口からだ」

「傷口から」

「腹に縦に大きく切られた傷があったな」

「はい」

「そことは別に。もう一つ傷があったのだ」

「それは何処ですか？」

「喉だ」

役に答えた。

「喉」

「そう、喉だ」

今度は二人同時に言った。そして警部は二人に応えたのである。

「喉にな。こう傷があった」

指で喉を横に掻き切る動作をしてみせた。

「スパツとな。どうやらそこから抜き取ったらしい」

「そうだったのですか」

「腹の傷は。また別の用途だった」

「別の？」

「中からな、内臓を取り出していた。一つ残らず」

「内臓を、ですか」

「まるで動物を食べる時の様な話ですね」

本郷は嫌悪感を、役は表面上は何もないように、それでいて内面

に露骨に憎悪を露わにさせていた。

「だろうな。血はどうやら吸ったようだし」

「吸ったのですか」

「ただし、唾液やそういつた証拠は残してはいない」

「綺麗に拭き取ったと」

「そもそもその傷自体が小さくて見つからなかった。一見しただけではな」

「また徹底してますね」

「指紋も何もない」

「それはまた」

「被害者の身体には証拠は何もなかったよ」

「寺での首と同じですね」

「そうだな」

三人は自然に俯くようになっていた。話が袋小路に入ろうとしていたからだ。

足取りが重くなるのがわかる。そして地下室へと歩いて行った。

「わかっていると思うが」

警部は地下室の前で二人に対して言った。

「かなり酷いぞ」

「わかってますよ」

「こちらも慣れていきます」

「そうか、そうだったな」

警部は二人の言葉を聞いて納得した。彼等の以前の仕事を知っていたからだ。

「済まない。詰まらないことを言ったな」

「いえ、お気遣いなく」

「それでは入りますか」

「うむ」

二人は警部に案内あれる形でその地下室に入った。そこは解剖室であった。

「もう解剖は今日は終わっていてな」

「はい」

二人は警部の説明に応えた。

「とりあえずおおよそのことがわかったただけだ」

「紐のことに血のこと、そして内臓のことですか」

「そう、大体そんなところだ」

暗い部屋の周りには様々な医療器具や機械が置かれている。三人はそれに気をつけながら中央にあるベッドを囲んだ。

そのベッドには白いシーツがかかけられていた。警部はそのシーツに手をかけた。

第十二章

「いいか？」

「はい」

「お願いします」

二人は頷いた。警部はそれを受けてそのシーツをゆっくりと取った。その下から白いものが出て来た。

ここで灯りを点ける。暗い部屋の中に黄色い灯りが点く。そこにその白い遺体が映し出された。

美しい女性だった。おそらく異性にもてただろう。楚々とした美貌と均整のとれた身体をしていた。

ただし生きていたならば。今の彼女は無残な姿でそこに横たわる屍となっていた。目は閉じられ口も開くことはなかった。生きていたらどんな綺麗な声を発したか。どんな美しい目だったか。そう思うと残念なことであった。

「彼女が被害者ですね」

「そうだ」

警部は暗い顔で応えた。

その腹は橋で見た時と同じ様に縦に大きく切られていた。その周りは紅く染まっている。

「血はここだけだな」

「中には殆ど残っていないと」

「そうだ。ここから吸い取った」

警部はここで遺体の喉を指し示した。

「だがな。証拠は残していない」

無念そうに首を横に振って言った。

「何もな。綺麗に証拠は消している」

「それは当然ですね」

それに対する役の言葉は醒めたものであった。

「人間が残す様な証拠は。残しはしませんよ」
「人ではないからか」
「はい。そこが重要なのです」
「役は遺体を見下ろしながら応えた。」
「人には人の、鬼には鬼の証拠があるのです」
「何か。掴んでいるのか？」
「残念ながら。その鬼だったという証拠だけです」
「役は遺体を見たまま申し訳なさそうに首を横に振る。」
「それ以外は何も」
「そうか」
「とりあえず先の被害者との共通点はありますね」
「そして今度は本郷が言った。」
「共通点か」
「まず被害者の身元は結構似ていますよね」
「そうだな」
「これは警部も気付いていた。」
「二人共いいところのお嬢さんだな」
「はい」
「そして習い事をしている。これも一緒か」
「それに付け加えてもう一つですね」
「もう一つ」
「容姿です」
「彼は強い声で一言こう言葉を出した。」
「容姿」
「二人共黒髪ですね」
「うむ」
「そしてそれが長い。しかも整った顔立ちの美しい女性です」
「そこは非常に大きな手掛かりになるな」
「この三つが揃うのはそうそう、いや滅多にないことですよ」
「確かにな」

「つまり次の犯人の目標も断定できますよね」

「次のか」

「大体出て来ませんか？古い家や良家のお嬢さんで黒髪の美人、それに習い事をしている」

「限定されてくるか」

「といつてもだ」

しかしここで役が話に入ってきた。

「何ですか？」

「確かに他の街ではそうだがここは京都だ」

「京都、ですか」

本郷はそれを聞いて苦い顔を作った。

「古い家は結構ある。それに良家もな」

「そういう土地でしたね」

只でさえ京都には百万の市民がいる。一口に言ってもかなり大きな街なのだ。歴史も伊達ではない。そうしたことが幾重にも重なってきているのだ。

「またそうした家は本当に習い事をよくする」

「ええ」

これもだ。京都の風習であろうか。古い家の娘はお茶にお花に踊りと習い事を身に着けなくてはならにとされる。そうでないと他所様に出せないとまで言われるのだ。古い家、良家はそれで階級めいた閉鎖的な社会にもなっているのだ。ここもまた京都の独特の世界であった。

「多いぞ、それに黒髪のお嬢さんというのも」

「やはり多いですか」

そしてそうした家は昔ながらの風俗を大事にする。髪を染めたり切ったりするのもやはり好まれないのだ。今はかなり違ってきているといつてもそこは京都である。まだまだ保守的でそうしたことは厳しいのだ。

「多いな。少なくとも全てをカバー出来るものではない」

「そうですね」

「我々だけではとてもな。その間にまた犠牲者が出る」

「何か敵の方が動き易いんですね」

「我々は全てを守らなくてはならない」

役はそれに応える形で言った。

「だが相手はその中の一つを狙って奪えばいい。どちらが有利か言うまでもないな」

「確かに」

「だがそれで諦める程私も諦めがいいわけではない」

「何かやるつもりですか？」

「とりあえず鬼の仕業であることはわかっている」

「ええ」

「とりあえずその三つの証拠も参考に調査を調べていくか」

そして警部はこの三つの証拠についてまた言及した。

「この三つの証拠はかなり重要だな」

「はい」

これは役も同意だった。

「それを生かすかどうかはこれから次第だが」

「っていつか生かさなくちゃ話にならないでしょ？もう二人も殺されているんですから」

「では頼むぞ」

「わかっていますよ」

本郷が応えた。二人はまた一つ重いものを抱え込むことになった。この仕事はこうして無限の見えはしない重いものを抱え込んでいくものなのであった。

この日は事務所に帰って終わりだった。二人は事務所に泊まり込み休む。夕食はコンビニで買ったパンやジュース、それに御握り等であった。

「今日は質素ですね」

「仕方ないな」

二人は御握りやパンを口に入れながら話をしていた。

「あまり時間がない。それでは食べるものも限られる」

「はい」

「そうした時に。やはりコンビニは便利だ」

「そこに行けば何でもありますからね」

「ああ。とりあえず私はこれを」

彼はサンドイッチにクリームパン、そして午後の紅茶であった。

「君は……また多いな」

「食わないともちませんからね」

本郷は一リットルのペットボトルの壮健美茶に御握り、チーズ蒸しパン、カツサンド、それにフランクフルトとカップヌードル、デザートにプリンであった。役のもの三倍程はあった。

「それでも食べ過ぎではないのか？ 太るぞ」

「生憎動いてますから」

「しかし私と同じ位だろう？」

「若いからいいんですよ。それよりも役さんこそそんな量で大丈夫なんですか？」

「ああ、まあな」

彼は素っ気無い返事を返した。返事を返すとサンドイッチを一口食べた。彼は野菜サンドである。

「今日はあまりお腹が空いていない」

「お昼もそうめんだったのに」

「あれで充分だ。どうも夏はな」

「食欲がないってわけですか」

「京都の夏は暑いからな」

彼は食欲がないのを夏の暑さのせいにしてきた。所謂夏バテというやつである。

「この季節にはあまり食べたくはない」

「そんなの言っていたら捜査で身が持ちませんよ」

「まあそこは何とかするさ」

彼はサンドイッチを食べ終えていた。

「だから安心してくれ」

「だといいですけれどね。まあ俺はいつも通り食っていきますよ」

「明日はもっと暑くなるそうだよ」

「今日よりもですか」

それを聞くと本郷も思わず嫌な顔を浮かべてしまった。

「そうだ。それもかなり蒸し暑いそうだ」

「うんざりしますね、また」

「だがそれでも捜査はある」

「ええ」

「明日からまたな。とりあえず今日はこれで終わるか」

役はそう言つと立ち上がった。

第十三章

「今から銭湯に行くが。どうする？」

「俺は後で行きますよ」

見れば彼はまだ食べていた。カップヌードルを嚙っている。カレーヌードルのビッグである。

「一人事務所にいないとまずいでしょう？」

「そうだな。では帰ったら洗濯でもするか」

「はい。けれど何か所帯じみてますねえ」

「それも仕方ない。事件が終わるまでここに泊り込みだからな」

「やれやれ。早く事件が終わってアパートで一息といきたいもんですよ」

「全くだな。ではな」

「はい」

役は銭湯に向かった。銭湯といってもスーパー銭湯でありかなり何でも揃っている。彼は水風呂とシャワーが好きなのだ。それに対して本郷はサウナもミルクやワインを入れた風変わりな風呂も露天風呂も好きであった。どちらかという本郷の方が風呂好きであった。

二人は交代で風呂に入るとクーラーをそのままにしてタオルケットを被ってソファに寝た。事務所の隣では洗濯機が音を立てている。そのいささかやかましい音を聴きながら眠りに入った。二人目の犠牲者が出たその日はそれで終わりだった。

翌朝になった。まずは本郷がゆっくりと身体を起こした。

「ふうっ」

身体を起こすと大きく背伸びする。シャツにトランクスといったラフな格好だった。

見れば彼はスーツの上を脱いだだけだった。どういうわけか彼が服を脱いだ姿は殆ど見たことがない。眠い目をこすりながらまずは

テレビのリモコンを手取る。そしてスイッチを入れる。

「昨日巨人は負けたかな」

彼が一日の最初に考えるのはそれであった。関西人であり阪神ファンなのだ。その彼が巨人の負けを心から望んでいるのは自明の理であった。巨人が負けた方が日本にとって非常によいことなのである。巨人が優勝して景気がよくなるということは嘘である。そんなことは関係がないのだ。むしろ巨人が負けて喜ぶ人達の励みの方が素晴らしい。巨人は負けなければならぬのだ。

テレビをつけるとスポーツニュースがやっていった。幸せなことに巨人は負けていた。

「よし」

本郷はそれを見て会心の笑みを浮かべる。身体中に元気がみなぎってくる。

「いいことだ。こうでなくちゃな」

巨人の敗戦という喜ばしいニュースの後はサッカー等の話だ。だが彼はそれにはあまり興味がなかった。

聞き流しながら新聞を取りに事務所を出る。そして建物の一階の自分達の事務所のポストから新聞を取り出す。当然読売新聞ではない。

まだ完全に醒めていない目で新聞の一面を見ながら階段を昇る。

一面は経済の話だ。正直彼にとつては興味のない話である。

読み飛ばしながらスポーツ欄へ移る。事務所に戻るとテレビのニュースはスポーツから社会に移っていた。

「昨日、京都市において」

「昨日のあれか」

本郷は女性のアナウンサーが報道する言葉を聞いてすぐに何のことかわかった。

「三条小橋で発見された死体は京都市在住の大学生」

「やはりな」

そのニュースを陰鬱な気持ちで聞いた。わかっていたことだがテ

テレビで聞くとなるとやはり嫌な気持ちになる。巨人が負けたという心地よいニュースは頭の中から消え事件のことで支配された。

「腹部を鋭い刃物で切り裂かれており」

「血がなかったってのは流石に報道しないな」

ニュースを聞いて思った。

「警察は先の女子高生殺害事件との関連を踏まえて捜査を行っております」

「実は俺達がやってるんだがまあそれはいいな」

そう呟きながらテーブルの上へ手をやる。そして朝食に買っていたパンを一つ手に取る。

「続きまして今朝入ったニュースですが」

パンを手に取るとまた新しいニュースがはじまった。

「ふう」

ここで役も目を覚ました。身体をゆっくりと起こす。

「あつ、起きました？」

「ああ。もう朝なんだな」

「ええ。まあこれを」

「済まないな」

本郷からパンを一個受け取る。それを口に入れる。

本郷はもう朝食を終えていた。食後の一服に煙草をふかしていた。

「今日は昨日の事故現場に行きますか？」

「そうだな」

二人は向かい合ってその日を打ち合わせをはじめた。テレビには注目していなかった。

「今朝未明清水寺にて」

「清水寺!？」

「何か催しですかね」

「この時期あそこでは何も無かった筈だが」

「そうですね。それじゃあ一体」

「発見された」

「発見された」

「何が!？」

ここで役の携帯が鳴った。すぐに出る。

「はい」

「お早う」

「あつ、これは」

電話の声は警部のものであった。

「遺体は」

「今テレビでもやってるがな」

「はい」

「京都市に住む女子高生の……」

「ってまさか」

テレビの放送と電話の話を同時に聞く本郷はまさかと思った。

「第三の犠牲者だ。すぐに現場に来てくれ」

「第三の、ですか」

「多分な。ではあっちでな」

警部はすぐに電話を切った。二人にはテレビでの放送だけが残さ
れていた。

「間違いないみたいですね」

「そうだな」

二人はテレビの放送を見て頷き合った。そして清水寺に向かうこ
とになった。

清水寺は舞台で有名な場所である。この高い舞台から見る景色は
あまりにも美しいことで知られている。だが今はその美しい景色も
関係なかった。本郷と役は朝靄の中で清水の舞台に立っていた。

「よう、お早う」

「はい」

警部の挨拶に応える。

「悪いな、朝早くから」

「いえ、これも仕事ですからね」

「それで被害者は」

二人はそちらに注意を向けていた。他のことには考えを回してもいなかった。

「あそこだ」

警部は舞台から見える木を指差した。見ればそこに一体の人形があった。

白い椿をあしらった赤い絹の鮮やかな着物を着せられている。そして木にかけられている。それはまるで木の間に座る少女の様にも見えた。確かにそれは少女であった。だが生きてはいない。そうした意味でそれは人形であると言えた。

人を人形にして着飾り、そして飾っていたのだ。清水の舞台に。赤と緑のあまりにも陰惨な美をそこに現わしていた。

「また悪趣味な真似をしてくれますね」

「ああ」

警部は本郷の忌々しげな言葉に応えた。

「被害者は女子高生だ」

「またですか」

見れば髪が黒く長い美少女だ。これも同じだった。血に塗れた顔で本郷達を見ていた。だがそこに表情はなく動くこともない。それが彼女が既に死んでしまっていることを如実に現わしていた。

「やはり良家のお嬢さんだそうだ」

「またしても」

「そしてそれを飾りますか」

「最初は池で次は橋、そして今度は木だな」

「はい」

「これには何の法則もないか」

「とりあえずはそう考えられますね」

本郷は被害者がかけられている木を見ながらそう述べた。

「さしあたっては。というところですが」

「そうだな」

「百人一首とかね。和歌にしてももうちょっと風流つてのがあるんですよ。これはそれとは別ですね」

「ただ。死体を飾るのを楽しんでいるだけなのか」

「首に吊るし、そして架け」

本郷は次に三つの殺し方に言及した。

「共通点はどれも殺し方が和風なところですね。犯人が鬼ならそれも妥当でしょうけど」

「鬼か」

「はい」

今度は役が答えた。

「間違いないです。これを御覧下さい」

「むっ」

役は懐から一枚の札を取り出した。それは真っ黒に焦げていた。

「この札はね、魔物の妖気に反応するのです」

「魔物の」

「そう、言うならばリトマス紙です。そして鬼に対しては」

「黒くなるのか」

「ええ。特に力が強ければこうして焦げます」

「そうか。では今度の魔物はかなり手強いな」

「ここまでできて全く手懸かりがありませんね」

「殺し方はやけに趣向を凝らしてますけれどね。今度は着物まで着せて」

「ああ」

「とりあえず被害者を下ろしてあげましょう。ずっとここで晒されてちゃ可哀想です」

「そうだな。おい」

警部はそれを受けて左右にいる制服の警官達に声をかけた。

第十四章

「遺体を下ろすぞ。そして署で解剖だ。いいな」

「わかりました。では」

「君達はまたここに残るんだろう？」

「はい」

二人は警部の言葉に頷いた。

「また色々調べさせてもらいます」

「何かと気になることがありますので」

「そうか、では宜しく頼むぞ」

こうして警部と数人の警官が遺体を下ろして署に戻り、後には本郷と役、そして現場調査にあたる数人の警官が残った。二人はそのまま調査にあたった。

「今回は少し捜査の方法を変えるか」

「どうするんですか？」

「これを使ってな」

懐から数枚の札を取り出した。

「協力してもらおう。行け」

札を投げる。するとその数枚の札は忽ち数匹の子鬼になった。そして寺のあちこちに散った。

「彼等なら私達の気付かないものも気付くからな」

「鬼には鬼つてわけですか」

「そうだ。さて、何が見つかるかな」

役は子鬼達を見ながら言った。

「若しかしたら何も見つからないかも知れないがな」

「どうでしょうかね」

二人は鬼達を見守っていた。その中の一匹は遺体があった木に登っていた。その鬼が暫くして役の下に戻って来た。

見ればその手には何か白いものを持っていた。それは花びらだっ

た。

「花、ですか」

「そうみたいだな」

彼はそれを子鬼から受け取る。そして手に取って見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼はその花びらを見てすぐに顔を顰めさせた。まるで見てはならないものを見てしまったような顔になっていた。

「どうしたんですか？」

「この季節にこの花とはな。妙なことだ」

「その白い花びらがどうかしたんですか？」

「どうかしたもない。この花は」

「はい」

「椿の花だ。夏にな」

「椿、ですか」

「そうだ。明らかにおかしいだろう？」

「そういえば」

本郷はここでふと気付いた。

「最初の事件はスイレンの池でしたよね」

「ああ」

「二番目は藤の蔓を使っていた」

「そうだったな。まだ取り調べは終わっていないが」

それには紫の花びらまであった。間違えようのない藤の花である。

「そして今度は」

「椿だ。服も花も」

「はい」

「花が三つだ。これはどういうことかな」

「その花ですけれどね」

本郷は考えながら述べた。彼にしてはあまりないことであったが熟考していた。

「スイレンは夏ですよね」

「そつだ」

これは今も咲いているからすぐにわかる。

「けれど藤は春です」

「うん」

歌舞伎の舞踊で『藤娘』というものがある。春を踊ったものであり歌舞伎の中でも人気の演目だ。昔から美貌の女形が踊ってきたものであり坂東玉三郎のそれはこの世のものとは思えない程の幻想的な美がそこにある。

「そして椿は冬」

「そつだな」

「季節がバラバラですよね」

「これが実に妙なことだ」

役もそこに気付いていた。

「季節が一致していないな」

「ええ」

「今は夏だというのに普通に藤や椿の花が出ている」

「今は栽培技術の発達で何時でも見られるようになったにしろ」

「ここに謎があるのかもな」

「花にですか」

「そつだ。わざと季節を無視した花を出したりもする」

役は言った。

「鬼は。そこに何かを見出しているのかもな」

「季節の異なる花を演出に使うことにですか」

「それと同時に少女だ」

また被害者に目を戻した。

「長く黒い髪の良い家の美女ばかり襲う」

「はい」

「おそらく生娘ばかりをな。異様な趣味だ」

「そこに茶に花に踊り」

「さらに限られてくる」

京都にそうした家は多いにしろだ。それでもこころも事象が重なれば自然と物事が狭まってくるものだ。二人は今それを感じていた。

「鬼が何者か、ですね」

本郷は呟いた。

「ここまで演出に凝れるのだ。相当そちらに造詣の深い者だ」

「それに同性愛者でしょうね」

「そうなるか？」

「はい。どうも今までの演出つてのを見ますとね」

本郷は遺体がかけられていた清水の木を見て言った。そこにも演出があつたからだ。

「どうもそこに感じるんですよ、そうしたものを」

「そうしたものを、か」

「はい。女の子ばかり狙うのはね。ある意味独特なんですよ」

「女でありながらか」

「男だつてそんなんですよ。同性にしか興味がない奴になるとね」

何時になく真剣な面持ちであつた。

「自分の世界を絶対に侵されたくはない、つていう強烈な意識が出て来るんですよ」

「詳しいな」

「そういう道の奴に知り合いがいるもんでしてね」

「ほう」

「おっと、だからといって俺がそうだつてわけじゃないですよ」

「それはわかっているつもりだ」

この言葉には思わず苦笑してしまった。

第十五章

「君が真正正銘の女好きなのは私が保証する」

「そりやどうも」

「そのうえでだ。やはり違うのだな」

「ええ。どうも一連の事件にそうした強烈な意識を感じるんですよ」

「同性愛者のか」

「両方の道知ってるのはまた違うんですけれどね。そっちにはかり入ってのめり込んでしまつと」

「そうなるのか」

「ですね。それもこれはかなり深刻ですよ」

「倒錯しているうえに嗜虐的だな」

「ええ」

本郷はその言葉に頷いた。

「それでいて完璧主義で。被害者をまるで絵みたいに飾って」

「尋常ならざる者か。鬼としても」

「どっちにしるこのまま放っておいてはいけませんよ」

「うむ」

役はまた頷いた。

「また犠牲者を出すだけですから」

「芸術と倒錯を愛する同性愛者の鬼か」

「それも花を特に愛でる」

「まさかとは思つがな」

「はい」

二人の脳裏に同時にある人物が思い浮かんだ。

「行ってみるか」

「そうですね」

本郷は役の言葉に応える。

「鬼が出るか魔が出るか」

「蛇ではないのだな」

「蛇ならこんなに警戒はしませんよ」

本郷は笑みを作ったがその目は笑ってはいなかった。

「案外大人しいものですからね、あれは」

蛇はそうしたもののである。外見は不気味だがこれといって人を襲うものではない。どんな大蛇も余程餓えてはいない限りあえて人を襲ったりはしないし蝮等の毒蛇も自分から向かわなければ何もして来ない。だが魔界の住人達はそうはいかないのだ。彼等は彼等の意図で以って人の世界に介入し、襲い掛かって来るのだ。そこに人の世界の摂理は何一つ適用されはしない。全くの異世界からの来訪者達なのだ。

「鬼なんか比べれば可愛いものですよ」

「そうか。そうだな」

役はその言葉に頷いてみせた。

「ではその言葉に従おう」

「鬼でも魔でも潰すんですね」

「そうだ。では行くか」

「はい」

警部には電話で話を着けてもう一度貴子の下へ来た。しかしその門は固く閉じられてしまっていた。

「気付かれませんでしたかね」

「ではやはり彼女が鬼か」

「あの」

門の前に立つ二人に一人の和服の少女が声をかけてきた。

「先生に何か御用ですか？」

「あ、はい」

二人はその少女に顔を向けた。見れば黒く長い髪を上でまとめた美しい少女であった。如何にも、といった感じの。

「先生は今御留守ですよ」

「そうなんですか」

「はい」

その少女は答えた。

「私の屋敷におられますが。御会いになられますか？」

「御屋敷にですか」

それを聞いただけで彼女もまた相当な家の生まれであることがわかる。

「宜しければ御案内致しますが」

「ええ、是非」

「お願いします」

二人はそれに応えた。そして彼女の案内の下貴子のいるその屋敷まで向かったのであった。

その屋敷はやはり異様なまでに大きかった。日本の古き良き趣のある屋敷であり古風な中に雅があった。二人はその中を少女に案内されて入ったのであった。

「確か先生は」

彼女は屋敷の中を見回して貴子を探した。

「こちらです。どうぞ」

「はい」

さらに案内されて庭の中を進む。すると庭の中にある池のほとりに彼女がたたずんでいた。

「先生」

「はい」

貴子は少女の声に応えこちらに顔を向けてきた。

顔を向けると二人と目が合った。同時に動きが止まった。

「お客様ですよ」

「私にですね」

「そうです。先生の御自宅の前におられたので案内しました」

「左様ですか」

貴子はそれを緊張した面持ちで聞いていた。二人の顔も何時になく険しい。

「お話ですよね」

「ええ」

貴子は二人の顔を見据えたまま答える。

「それでは私はこれで。ごゆっくり」

一礼してその場を後にする。気を使って彼等だけにしたのだ。だが果たして三人のことを知っていればそうしたであろうか。そこにはえも言われぬ緊張した空気が漂っていた。

二人と貴子は暫く無言で睨み合っていた。その中でまず役が口を開いた。

「おわかりだと思いますが」

「はい」

貴子はその声に応えた。

「今回は先のととは別の用件でお邪魔しました」

「左様ですが」

「もうおわかりだと思えますけどね」

今度は本郷が口を開いた。

「龍華院貴子さん」

「はい」

彼の呼び掛けに応じて頷く。

「貴女は。一連の事件のことを御存知ですね」

「否定はしません」

彼女はまた答えた。

「三人共。私の弟子でしたから」

「やはり」

「それでは」

二人はそれを受けて動くこうとする。だがそこで貴子は言った。

「お待ち下さい」

「ここまで来てそれはないでしょう」

本郷はその右手の指と指の間に短刀を一本ずつ挟んでいた。それです。まず先制攻撃を仕掛けようとしていたのだ。

役も懐に手を入れていた。そこから攻撃を仕掛けようとしているのは明白であった。

「私を見て下さい」

「!？」

二人はその言葉に動きを止めた。

「どういうことですか!？」

だが警戒を緩めてはいない。役の札の焦げたのから予想する限り彼女は相当に強い力を持つ鬼である。それは当然の行動であった。

「私の影を」

「影を」

「はい」

彼女は言った。

「御覧になって下さい」

「一体何を」

影を武器にして襲い掛かることも予想された。魔界の住人はそもそもこちらの世界とは理屈が全く違うのだ。影の魔物もいる。二人はそこでも警戒を怠らなかつた。

その言葉通りに影を見る。それを見て二人は落ち着きを維持したまま言った。

「これはどういうことですか？」

「御覧になられた通りです」

貴子は言った。

「今の私は………。影がないのです」

「どういうことですか？」

役はあらためて彼女に問うた。

「それに今の貴女から妖気は感じられない。いや」

彼はさらに言葉を続けた。

「最初に御会いした時から。あの犯人は貴女ではないというのですか？」

「私は人を殺めるようなことはしません」

彼女はこう答えた。

「私は確かに道を求めていますか」

「はい」

「人を殺めるのは。決して道ではありません」

「では御聞きしますが」

役はそれを聞いたうえでまた貴子に尋ねた。やはり警戒は解いてはいない。

「その影は。一体どういことなのですか」

「これこそが鬼なのです」

「影が」

「そうです影は私の心の裏」

彼女の顔には影ではなく陰が差していた。心にも差していた。

「そして鬼だったのです」

「その鬼が犯人なのですな」

「そうです」

貴子はこくりと頷いた。

第十六章

「その証拠に今の私には影がないのです」

「鬼になり生贄を求めていると」

「今彼女は古い寺にいます」

「寺に」

「そうです。かつては私の影だったからわかります」

彼女は言った。

「そこで。また犠牲者を貪ろうと」

「役さん」

「ああ」

二人はそれを聞いて頷き合った。

「そしてその場所は」

「嵐山です」

嵐山だと答えた。

「そこにいます」

「嵐山」

「それでは」

すぐにそこに向かおうとする。だがそれを貴子が呼び止めた。

「お待ち下さい」

「また何か？」

二人はそれに応えて貴子を見る。見ればその顔は強張っていた。

「私も……同行させて頂きたいのですが」

「貴女もですか!？」

「はい」

こくりと頷いた。強張った顔のまま。

「影の居場所は。私にしかわかりませんから」

彼女は言った。

「ですから。お願いです」

「しかしですね」

本郷はそんな彼女に対して言葉を返した。

「相手は。もう単なる貴女の影じゃないんですよ」

真剣に咎める声になっていた。

「あれはもう。鬼です」

「はい」

それでも貴子に戸惑いはなかった。強い調子で頷く。

「それはもう承知しております」

「承知していると言われましてもね」

「竜華院さん」

そして役も口を開いた。口調は本郷と同じである。

「申し上げておきますが今の貴女の影は貴女から離れております」

それはただ単に離れているだけではない。彼はそれを言いたいのだ。

「何もかも。既に人ではないのです」

「鬼だと。仰りたいのですね」

「そうです。先程から私も本郷君も申し上げておりますが」

彼は言う。

「普通の人間では。相手にはなりません」

「食い殺されるのがオチですよ」

「ですが影の居場所がわかるのは私だけです」

貴子はそれでもこう言い返した。

「ですから」

「どうしてもですか」

「はい」

役に対して頷く。

「自分のことは自分で始末をつけたいのです。可能な限り」

「役さん」

それを受けて本郷が役に顔を向けた。

「どうします?」

「そうだな」

役は口に手を当てていた。どうやら考え込んでいる様である。

「竜華院さん」

そのうえでまた貴子の名を呼ぶ。

「はい」

「断っておきますが命の保証はありませんよ」

まずはこれを念押しした。

「それはおわかりですね」

「はい」

また強い言葉で頷いた。

「それはわかつています」

「ただ不思議ですね」

「何がだ？」

役は本郷がここでこう言ったのに顔を向けた。

「その影の行動ですよ。つまりは竜華院さんの心の裏側ですよね」

「ええ」

「それだから居場所もわかる。けれどそれだと向こうもそうですよ

ね

「おそらくは」

「それですよ。何で影は入れ替わらなかったんですかね」

「入れ替わるとは!?!」

「言っただけですよ」

本郷は役にそう返した。

「ほら、よくあるじゃないですか。邪な心が本人を殺して成り代わるって話」

「ああ」

「俺、最初はそうじゃないかなって思ってたんですよ。けれど違ってましたよね」

「そういえばそうだな」

役も言われてみてそれに気付いた。

「影はそれをしては来なかったな」

「それはおそろく」

「おそろく!？」

二人は貴子の言葉に顔を向けた。

「いえ……」

だが彼女はここで顔を背けてしまった。

「多分。違いますね」

二人は貴子のその態度に妙なものを感じた。だがここはそれについてでは聞かなかった。彼女を氣遣ったのである。だがここに大きな秘密があることにやがて気付くのであった因果な場面で。

「それでは行きますか」

本郷は全てを納得したうえでこう言った。

「嵐山に」

「はい」

貴子もそれに頷く。

「それでは宜しく願います」

「わかりました。ところで竜華院さん」

「はい」

彼女は役の言葉に顔を上げた。

「貴女は武芸の心得は」

「残念ながら」

その言葉には首を横に振った。

「そうですか」

「道に専念して参りましたが。武の道は」

「まあ仕方ないですね」

だが二人はそれを当然だと受け止めた。

「やっぱり戦いは俺達二人がやりますんで」

「そこはお任せ下さい」

「わかりました。それでは案内をさせて頂きます」

「ええ、お願いしますね」

こうして二人は貴子を伴って鬼との戦いに赴くことになった。そして嵐山に向かうのであった。

嵐山は北からは全くの正反対にある。北が京都の北東にあるのに対して嵐山は西南にある。同じ京都にありながらその距離は呆れる程遠いのだ。

三人はバスで嵐山に向かった。途中何度も信号で止まり、着いた時には本郷は不機嫌さを露わにさせていた。

「電車で行けばよかったですね」

「そうか？」

だが役は彼とは全く違い落ち着いた様子であった。

「中々いい道程だったと思うが」

「役さんはこのバス、好きなんでしたね」

「何処に行っても料金は同じだしな」

京都の市営バスはそこが非常にいい。乗り心地も悪くなく、例えば金閣寺から京都駅へ行っても運賃はすぐ側に行くのと全然変わらないのだ。京都市内を動き回るには案外バスも悪くないのだ。

「おまけに街もよく見られる」

「成程、そういうことですか」

「君はどうもこの街並が気に入らないようだがな」

「別にそうでもないですけど」

しかし京都に何かと思うところがあるのも事実だ。

「まあいいです」

「そうか」

「それで竜華院さん」

本郷は役から貴子に顔を向けて尋ねてきた。

第十七章

「ここなんですよね」

「はい」

彼女はそれに応えて頷く。

「ここです。間違いありません」

「役さんの方はどうですか？」

「今のところ反応はないようだな」

懐から札を取り出して言う。見れば札は白いままだった。綺麗な白が目に入る。

「けれどここにいると」

「竜華院さんが仰るにはな」

「こちらです」

貴子は山の方を指差した。

「こちらに。私の影が」

「行きますか」

「ああ」

二人はそれを聞いて頷き合った。そして貴子が指差した嵐山の方へ向かった。

嵐山はこの名前にもなっておりここでは最も高い山である。緑豊かなこの山を今三人は登っていた。

時刻は間も無く夕暮れになるうとしている。だが彼等はまだ影に会ってはいなかった。

「こちらなんですよね」

「はい」

最後尾には貴子がいた。彼女は先頭を歩く本郷に答える。

「感じます、こちらに」

「貴女の影の気配を」

「ええ、こちらで間違いありません」

「山ですか」

「厄介だな、少し」

役は辺りを見回しながらその表情を暗くさせた。

「厄介なのですか？」

「ええ、戦うにはね」

彼は答えた。

「夜の山の中は。視界も悪いですし」

「それに鬼つてのは魔性ですからね。夜の方が力は強いんですよ」

「そうなのですか」

「元々鬼は山にいるものですしね」

これは童話等によくある話である。かつて山は異世界であった。

朝廷に逆らう存在でもあった鬼達はその異世界に根城を置く。大江

山の酒吞童子がそうであったようにだ。

「かなり厄介ですよ」

「はあ」

「まあ貴女は安全な場所におられればいいです」

「それで宜しいのですか？」

貴子は役の言葉に顔を上げた。

「貴女は武道の心得はないのでしたね」

「ええ」

また役の言葉に頷く。

「ですから。仕方ありません」

「それにこれが俺達の仕事ですしね。まあ任せて下さい」

「では。お願いします」

「了解」

今度は本郷が答えた。三人はさらに深い山道へと入って行く。

嵐山を越えて嵯峨小倉山に着く。その麓で三人は妙なものを見た。

「あれは!？」

それは青い炎であった。暗くなるうとする山の麓でそれは浮かんでいた。

「人魂か！？いや違うな」

二人にはその炎が何かすぐにわかった。

「あれは。鬼火だ」

「ですね」

本郷は役の言葉に頷く。

「近いか」

「間違いなくね」

「あの」

二人に貴子が尋ねてきた。

「何か？」

「あの青白い火に何かあるのですか？」

「鬼火って言葉は聞いたことがありますよね」

「ええ、まあ」

普通に本でも出て来る言葉だ。貴子もそれは単語だけは読んだことがある。

「あれはね、鬼が出す火なんですよ」

「はあ」

これは知っていた。だから鬼火なのだ。

「言い換えると。近くに鬼がいたら出るんですよ」

「ではもうすぐ側に」

「そういうことです」

答える本郷の顔が険しくなった。

「暫く。俺の側から離れないで下さいよ」

「はい」

貴子は本郷の言葉に従い側に寄った。もう辺りは暗くなり木々の間からは青黒い空と黒くなった葉が見える。その幹もまるで細長い妖怪の手足の様に見える。昼の山とは全く違った姿であった。

「そろそろ。出ますから」

本郷は背中から刀を抜いた。それを左手に構える。

右手には小柄を持っている。所謂二刀流というやつである。

役は懐に手を入れていた。札を使うつもりであろうか。二人は戦闘態勢を整えて先へ進んだ。

鬼火はその下にあるものを映し出していた。それはこの世にあつてはならないものであつた。

暗い木々の中にそれはいた。少女の骸の上に己が身体を置き、死肉を貪っていた。

同時にその身体を犯している。己が身体を骸の上に置き、乳房をまさぐり、腰と腰を重ね合わせている。犯しながら喰らう、最も忌まわしい行為であつた。

それを行っているのは貴子であつた。いや、貴子と同じ姿を持つ存在がであつた。黒と赤の豪華な着物をはだけさせ、犯しながら喰らっていた。青い炎の中に浮かび上がるその顔は貴子と同じものであつたがそこには邪悪な相が浮かび上がっていた。

「あれか」

役はその女を見て言った。女は彼等に気付くことなく骸を貪り続けていた。

血に塗れた内臓をその手に取り口に入れる。血を啜る音が聞こえる。暗い山の中に不気味な音が響いていた。

二人はその女に対して攻撃を仕掛けようとする。だがそれは適わなかつた。

「!？」

女は気配に気付いたのか顔を動かす。そしてゆっくりと起き上がった。

「誰かおるな？」

黒と赤のはだけた着物をそのままに起き上がる。その口には髪を噛んでおり少女の生首が吊り下げられていた。

「この気配は……わらわか」

そして貴子の気配も感じたようである。ふと目を細めた。

「わらわよ。何をしに来たのじゃ？」

「貴女を封じる為に」

貴子は本郷の側から言った。青い炎の中に浮かび上がる己自身を見据えていた。

「わらわをか？」

女、いや鬼は少女の髪を啜えたまま語る。そこから吊り下げられている首は空虚を眺め、血に濡れていた。あまりにもおぞましく、同時に否定せずにはいられない美しさがそこにあった。

第十八章

美女の首を啜えて立つ鬼はぞつとする様な美貌と笑みをたたえていた。赤い目は邪悪に輝き貴子を見ていた。そして二人も見据えていた。

「その二人」

鬼は本郷と役に声をかけてきた。

「わらわに何用か」

「月並みな台詞だね、また」

「用があるから来ているのだ」

「ほう」

鬼は二人のその言葉を聞いて目を細めた。

「では。死合うつつもりか？」

「ああ、それさ」

「貴様をこれ以上放っておくわけにはいかない。覚悟するのだな」
本郷は刀を、役は札をそれぞれ構えた。それで戦うつつもりであった。

「よいのか、それで」

「今更命乞いか」

「主等には言うてはおらぬ」

だが影は二人を見てはいなかった。

「わらわよ」

もう一人の自分である貴子に声をかけてきたのだ。

「それでよいのか？」

「構いません」

貴子は自分自身の問いに対して毅然と答えた。声は毅然としたものであった。だがその顔は蒼白となっていた。

これは鬼となった自分自身を見ての為だと思われた。しかし真相は違っていた。二人がそれを知るのは全てが終わってからのことだ。

あつた。

「貴女が倒せるのなら」

「そうかえ」

鬼はそれを聞いてその赤く光る目をさらに禍々しく光らせた。

「では。わらわも倒されるわけにはいかぬ」

「そういうのはどの化け物でも言うな」

「その者」

「何だ!？」

本郷は鬼の言葉に応えた。

「わらわを化け物と言つたか」

「それ以外の何だつていうんだよ」

本郷はその禍々しく光る目と耳まで裂けた口、そしてその中から見える血に濡れた牙の様に鋭い歯を見据えながら返した。唇もまた血で濡れ、それが紅の様であつた。一条伝わり、白い顎に赤い糸を描いていた。その血は着物にも着いている。首は今は手に持ち、そこで空しく空を見上げていた。少女の首には感情は見られなかつた。虚ろであつた。

「人は食うし犯すしよ」

「当然のことよ」

鬼は平然とこう答えた。

「人の美を味わう」

彼女は言う。

「美しきおなごの身体を堪能することこそ最高の美よ」

「喰つて犯すのがかよ」

「左様。主にはその芸術がわからぬか」

「生憎俺は只の人間なんぞね」

構えを変えた。中段から八相になる。

「そんなことはわかりたくもねえな」

「無粋なことよのう。美がわからぬとは」

「今までの三つの事件も手前だな」

「そうじゃ」

鬼はそれを認めた。

「隠すこともない。あれはわらわがしたことじゃ」

首を自分の前にやる。そしてその唇に接吻した。

接吻しながら舌を入れる。もう動かない舌に己の蛇の様に長い舌を絡み合わせていた。

「味わってやった後で。飾ってやったのだ」

「あんなところにか」

「美しいじゃろう？この娘もそうしてやるつもりじゃ」

鬼は晒いながら言った。

「今度は。夏の花がよいのう」

「季節はどれでもよいのかよ」

「それは違うのう。どんな季節でも常に全ての花があるのがよいのじゃ」

これは貴子と同じ考えであった。やはり影だけのことはある。

「無粋よのう。美の道を解さぬ者は。嘆かわしいことじゃ」

「嘆かわしくてもそうじゃなくても関係ねえ！」

本郷は激昂した言葉を吐いた。

「手前がやったことが許せねえんだ！覚悟しやがれ！」

右手に持つ小柄を投げた。それは鬼の胸を狙っていた。

「これで！」

「無駄なことを」

だが鬼はそれを見ても落ち着いていた。うつすらと笑みを浮かべていた。

「その程度でわらわを倒せると思うておるのか。愚かな」

その小柄を掴んだ。それで終わりであった。

「なっ！」

「ふん」

その小柄を手にとって眺める。

「よい刀じやのう。持つておる者は愚かじゃが形はまことに美しい」

「どうやら鬼は刀の美もわかるようであった。まじまじと見ている。それに退魔の力も備わっておるか。じゃがな」

「あえてその小柄を掴んだ。」

「わらわには効かぬ。では返すぞ」

小柄の刃を掴んだせいでその手と指が切れる。手が己の鮮血で紅く染まるがそれすらもうつとりと眺めていた。どうやら血というものに対して倒錯的な欲情を抱いているようであった。

その血塗られた刃を投げ返す。それは一直線に本郷に向かって来た。

「チイツ！」

左手の刀でそれを打ち落とす。それで何とか防いだ。

「俺の小柄が効かないなんてな」

「あの程度では天邪鬼さえ倒せぬぞ」

鬼は妖艶にして残忍な笑みを浮かべてこう述べた。

「青いのう、まだまだ」

「それではこれではどうか」

今度は役が仕掛けた。懐の札を掲げる。

「受ける」

その札を全て投げる。するとそれは赤い炎の矢となった。

赤い矢達が襲い掛かる。だがここで鬼の姿が分かれた。

「!?!」

「わらわを何だと思っておる？」

矢は空しく鬼の分身を通り過ぎた。それで矢をかわした。

「わらわは影。影は何時でも消えることも出来る」

「闇の中でか」

「左様。闇は影」

「闇」

本郷はふとその言葉に反応した。だが今はそれどころではなかった。

「闇はわらわの力の源。今それを見せてやるぞ」

腕を一閃させた。するとそこに闇が一条姿を現わした。

それは薙刀となった。鬼は首の髪を口に啜えるとその薙刀を両手で構えてきた。

「この刃でな」

「気を着ける、本郷君」

彼は隣にいる本郷にそう声をかけてきた。

「あれは。只の薙刀ではない」

「鬼の力の薙刀ですか」

「そだ、闇だ」

彼は言った。

「その刃は刃であって刃ではない。受けるなよ」

「受けられるものじゃないってわけですか」

「そうだ」

彼の言葉はこれまでになく強かった。

「受けると。その瘴気で死ぬ」

「この刀だって普通のじゃないんですけれどね」

「それでもだ。それに相手は薙刀だ」

「ええ」

「普通にやっても手強い。用心しろよ」

薙刀は女性が扱うものとされている。大奥等ではよく使われている。それで一見か弱い武器だと思われるがそれはとんでもない間違いである。

それどころか薙刀程恐ろしい武器はないのだ。

まずはリーチが長い。槍に匹敵する。そして斬れ味も鋭い。日本刀よりもいい程だ。そして速さ。振り回すだけで相当な速さになる。突くのも斬るのもいい。だから薙刀を相手にするには相当な覚悟が必要なのだ。本郷も口では軽口を叩いてはいるがそれはよくわかっていた。

「それじゃあ」

「接近戦は避けるか」

「まずは挨拶にね」

今度は手裏剣を出してきた。八方手裏剣である。

「手裏剣か」

鬼もそれに気付いた。

「小柄と同じこと。愚かなことじゃ」

「生憎手裏剣つてのは特別でな」

だが本郷はそう言われても臆してはいなかった。

「小柄みてえに。直線だけじゃねえんだよ」

「ほう」

「それを今。見せてやるぜ」

まずは数個投げた。投げた直後に姿を消す。

「ムッ」

「気をつけな」

鬼が薙刀で最初に投げた手裏剣を払った時に本郷の声がした。

「手裏剣はこうした場所で真価を發揮するんだからな」

今度は横から手裏剣が出て来た。また数個だ。

「横か」

「さて、それはどうかね」

だが声は横からではなかった。上からだった。

「!?!」

「言っただろ、手裏剣の動きってな独特だっつてな」

「妖かしの術を使っつておるか」

「違うね」

だが闇の中の本郷の声はそれは否定した。

「これはな、俺のオリジナルなんだよ」

「オリジナルか。また舶来の言葉を」

「あんた、中々古風だね」

「日の本以外から来ておるものは皆舶来よ」

鬼は本郷のその言葉には笑みを作ってみせた。だがその笑みは余裕の笑みであった。本郷の攻撃を前にしても余裕であることの証で

あつた。

第十九章

「ならば」

役は今度は銃を構えた。それで鬼の額を狙う。

銃口が火を噴いた。そこから銀の弾丸が放たれる。しかしそれも身を分けてかわすのであった。

「無駄だと言っておろう」

「くっ」

「銀は確かにわらわの様な者を滅ぼす力はある。じゃがそれは射抜けばこそ」

「当たるつもりはないということか」

「そうじゃ。残念じゃったな」

「.....」

貴子はそんな鬼を黙って見ていた。鬼の言葉に何かを感じているようであった。

「この程度の軽い攻撃なぞ。当たってやるわけにはいかぬ」

「じゃあ俺のこれはどうなんだよ」

上から手裏剣の雨が降りる。どうやら本郷は木々の上を飛び回りながら鬼に対して攻撃を仕掛けているようなのである。

「子供騙しって言うのかよ」

「そうじゃな」

鬼は手裏剣を見ることなく平然と左右に動いてかわしている。見れば身体は全く動いていない。地の上を滑ってかわしていたのであった。

「童の遊戯じゃな」

「クッ」

「所詮主等は人よ」

鬼は二人を侮蔑した声で言い捨てた。

「わらわの様に鬼ではない」

「だけどな」

本郷は攻撃を止めた。上から鬼に対して言う。

「鬼はな、人間に倒される宿命なんだよ」

「ほう」

「こつやってな」

「面白い。来るか」

鬼は上を見上げて構えた。上から本郷が刀を振り下ろしながら襲い掛かってきていた。

「死になっ！」

役も援護に式神を放つ。二人の連携攻撃だ。だがそれを見ても鬼は冷静なままであった。

「所詮無駄よ」

消えた。それで二人の同時攻撃もあえなくかわってしまった。

「チツ！」

「クツ！」

二人はそれを見て同時に舌打ちした。攻撃は失敗し、本郷の刀は空を斬り、役の式神は空しく飛ぶだけであった。

「甘いのう、まことに」

鬼は姿を現わした。少女の首を啜え、遠くで笑っていた。

「この程度では。腹ごなしの舞踊にもならぬわ」

「何処までも。余裕だな」

「わらわを倒したければ源頼光か八幡太郎でも連れて参れ」

どちらも平安期にその武勇を知られた剛の者達である。その武勇は言うまでもない。

「さすれば少しは楽しめるであろうに」

「俺達の手にはかからねえってのかよ」

「無理じゃな」

鬼の言葉は相変わらず余裕に満ちたものであった。

「主等ではな。その証拠にわらわは息一つ乱れてはおらぬ」

「じゃあ今度こそ」

「無駄だ、本郷君」
「役は鬼に向かおうとする本郷を制止した。」
「役さん、けどよ」
「一人では。あの鬼には勝てない」
「彼は首を横に振ってこう述べた。」
「それはわかっていると思うが」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「その言葉にさしもの本郷も沈黙してしまった。」
「いいな」
「わかりましたよ」
「無然としてだがそれに頷いた。」
「じゃあここは止まりますよ」
「うん」
「役はその言葉に頷いた。」
「ほほほ、よい心掛けじゃな」
「鬼はそんな二人を見て嘲笑してきた。」
「よいぞよいぞ」
「うるせえ」
「本郷はそんな鬼に対して言い返す。」
「これで諦めると思うなよ」
「何度来ても同じじゃ」
「しかし鬼の態度は変わりはない。」
「主等では無理じゃ」
「へっ、大した余裕だぜ」
「それではな」
「鬼は姿を消した。」
「わらわを倒すつもりなら何時でも来るがいい」
「ここの屋敷で待つておる」
「屋敷!？」
「私の別邸です」

貴子が言った。

「ここ嵐山には私の別邸があるのです」

「そういうことか」

「そこに参れ。何時でも相手をしてやる」

気配まで消えた。後には闇の中苦々しい顔をしている本郷と役、そして無念の顔で俯く貴子だけがいた。

貴子の無念は何の為の無念であろうか。それは誰にもわからない。しかし彼女は同時にそこに決意も宿らせていた。それは強い決意であつた。

翌朝嵐山の大堰川の船の上に生け造りの様に並べられた少女の遺体が見つかった。その遺体は黄色と白の菊の花で飾られていた。今度は秋であつたのだ。

「これもあいつには芸術なんでしょうね」

「おそろくな」

二人はその船を川辺から忌々しげに眺めていた。その横には警部がいる。

「犯人、いや鬼と遭つたそうだな」

「はい」

役がそれに答える。

「直接、刃を交えました」

「そうか」

警部はそれを聞いて表情を変えずに頷く。

「だが。仕留められなかつたか」

「申し訳ありません」

「言葉もありませんよ」

役は謝り本郷はふてくされた言葉であつた。

「私達二人がいながら」

「君達二人でも倒せなかつたのか」

だが警部は二人を咎めたりはしなかつた。それどころかその話を聞いて顔を強張らせてきた。

「そこまで手強いとはな」

二人の実力はよくわかっていて。だからこそこう言ったのだ。

「恐るべき相手と言うべきか」

「言葉ありません」

「俺の小柄も手裏剣も刀も。あいつには効きませんでしたよ」

「ううむ」

「忌々しいことにね。それは本当のことです」

「だが君達しかいない」

それでも警部は二人にこう言った。

「それは。わかっているな」

「はい」

「よおくね」

「では。引き続き頼む」

「わかりました」

役は沈痛な顔でその言葉を受けた。

「取り逃してこんなことを言うのは何ですが」

そして述べた。

「今度こそは」

「頼むぞ」

本当に二人しかいないのだ。魔物の相手を出来る人間は僅かしかない。その中でもこの二人はとびきりの腕利きである。相手がどれだけの魔物であろうとも今はこの二人に任せるしかなかったのだ。

第二十章

二人は警部と別れて今度は嵯峨野の茶屋で貴子と会った。そして昨夜のことに関して話をはじめた。

三人は個室で話をしていた。貴子は本郷と役に正対している。座布団の上に正座して二人と対しているのである。

三人の前には緑茶ときな粉をまぶした団子が置かれている。茶はこの京で採れた最高の茶である。三人はそれを飲みながら話をしていた。

「昨夜のことですが」

「まずは貴子が口を開いた。」

「御疲れ様でした」

「何、いいですよ」

「それに本郷が返す。」

「俺達はこれが仕事ですから」

「全て私が原因だというのに」

「いえ、それは違います」

「その言葉は役が否定した。」

「御気遣いは」

「気遣いではありません。あの鬼は貴女のせいではないのです」

「役は彼女を宥めるのでもなく、咎めるのでもない声でそう述べた。」

「鬼は人の心の闇にもあるもの」

「闇にも」

「今の貴女は貴女の心の中の光の部分」

「光なのですか」

「言い換えると人の心なのです。あれは貴女から離れた鬼なのです」

「私から離れた」

「そうです」

「そのうえでまた述べた。」

「あれは貴女ではないのです」

「私ではなく」

「鬼です。貴女は鬼になると仰いましたね」

「ええ」

それは事実である。こくりと頷く。

「しかし人は鬼にはなれない」

役はさらに言った。

「人は人なのです。そもそもが鬼ではないのですよ」

「しかしあの影は」

「人の身体は器に過ぎません」

役は何かを言おうとした貴子にまた言った。

「一つの器の中に二つのものがあるのです」

「二つのものが」

「人と鬼が」

二つの心である。人の身体という器にそれが同時に存在しているのだ。役は貴子にそう語っていたのである。

「おわかりでしょうか」

そのうえでまた言う。

「あれは。真正銘の鬼なのです。人である貴女ではない」

「左様ですか」

「そうです、ですから御気にやまれることはないのです」

「はあ」

「そして」

「そして？」

「あの鬼を止めるのには。やはり貴女の御力が必要なのです」

「私の身体という器に共にいたからこそ」

「そうです」

矛盾するようであるがしてはいない。器の中に共に存在していたから互いのことが通じるのである。人と鬼は決して相容れないものであるが同時に奥底では同じものでもあるのだから。

「宜しければ。御力をお貸し下さい」

「わかりました」

役のその言葉にあらためて頷いた。

「それでは早速」

「早速ですか」

「ええ」

応える貴子の顔はこれまでよりもさらに真摯なものであった。

「昨日の戦いで一つわかったことがあります」

「それは一体」

「考えです」

貴子は述べた。

「考えですか」

「そうです、鬼の考えが私にはわかったのです」

「そうだったのですか」

「鬼は元々私の中にいました」

彼女は言う。

「だから。私は鬼の考えがわかるのでしょ

「う」

「役さん、それってかなり大きいですよ」

本郷はそれを聞いて役に言った。

「あいつの考えがわかるんなら。先手を打つことだって出来ます」

「そうでもないとおの鬼には勝てそうにないしな」

それは役もわかっていた。

「勝つにはあまりにも手強い相手だ」

「ええ」

「考えが読めない限りはな」

「じゃあ決まりですね」

「いや」

しかし彼はそれには首を縦に振らなかった。

「そう言い切るにはまだ早いな」

「早いですか」

「そうだ。仮に竜華院さんが鬼の考えを読むとする」

「はい」

「その伝達はどうするのだ？まさか竜華院さんに側にいてもらって口で直接教えてもらうのか？」

「それは」

「無理だろう。そんなことをすれば鬼にこちらの考えが読まれてしまう」

「ですね。じゃあどうすれば」

「実は方法がないわけではない」

本郷はここで言った。

「何だ、あるんですか」

「そうだ、術を使う」

彼はさらに言う。

「札を使ってな。伝心の札だ」

「伝心の」

「それぞれの身体にこの札を貼る」

懐から数枚の青い札を出してきた。本郷と貴子にそれを見せながら説明する。

「これで互いの心を伝え合うことができるのだ」

「じゃあそれを使えばいいじゃないですか」

「しかし」

だが役はここで難しい顔をした。

「この術には欠点が一つある」

「あっ、やっぱり」

本郷は役のもったいぶった様子からそれを悟っていた。

「それがありませんか」

「その欠点は伝えるのは心だけではないということだ」

「じゃあ何を伝えるんですか？」

「傷だ」

役は目を決して述べた。

第二十一章

「互いが受けた傷まで伝える。例えば私と本郷君がそれぞれその札を身に着けたとする」

「はい」

「そして私が交通事故に遭うと本郷君も同じダメージを受けるということだ」

「じゃあ俺が鬼にバツサリとやられたら竜華院さんもってわけですね」

「そういうことになる」

役は何時になく真剣な声であった。

「それがどういうことか。わかるな」

「わからない筈がありませんね」

本郷は少し不敵に笑って述べた。

「死ぬのは俺だけじゃないってことですか」

「そして三人が着ければ一人のダメージが他の二人にも及ぶ」

「ぞつとしないですね」

「だから。使うにはかなりのリスクが伴うものだ」

「けれどそれを使わないとどうにもならないですよ」

本郷は素直にそう述べた。

「相手が相手です。あんな動きをする奴はね」

「そうだな」

「それに一つ気になることがあるんですよ」

「気になること？」

「竜華院さんは鬼の居場所がわかるんですよね」

「はい」

貴子は本郷の問いに答えた。

「それで考えも。向こうもそうなんじゃないかな、って思ってた」
「ふむ」

役はそれを聞いて口に手を当てた。そのうえで考える顔になった。
「可能性はあるな」

「そうですね。だとしたらその札も無駄になりますよ」

「では防御手段も用意しておこう」

彼はまた述べた。

「防御手段」

「鬼用の結界を作る」

「結界ですか」

「そう、それであちらの念を絶つ」

「それで向こうから悟られる心配を絶つ、というわけですね」

「手頃な寺か神社を使ってな。比叡山に頼むのがいいか」

比叡山延暦寺は京都の北東に位置する。これはこの北東が丑寅の方角であり鬼が入りするとされていたからである。最澄がここに寺を開いたのは京都を護る為であった。なおそれとは反対の南西の方角もまた鬼が入りするがここには高野山金剛峰寺が置かれている。これもまた京都の守護を司っている。京都という街は魔物を恐れた街である。その遷都が桓武天皇が弟君の霊を恐れられたからであり、至る所に封魔、退魔の仕掛けが施されている。実に変わった都でもあるのだ。なおこれは東京も同じ傾向がある。江戸からあの街もそうした配慮が為されているのである。我が国の街は魔物を恐れていると言っても過言ではないのだ。

「そこに竜華院さんを護ってもらって」

「我々で鬼を討つ。その動きを伝えてもらってな」

「よし、それでいいですか」

本郷はそれに応えて貴子に顔を向けてきた。

「決着を着ける為に延暦寺へ」

「はい」

貴子には断る理由はなかった。こくりと頷いた。

「是非。お願いします」

覚悟を決めた顔であった。かなり強い覚悟である。二人はそれは

延暦寺に入り、自分達に協力するのを覚悟してくれたととらえた。だがそれ以上の覚悟があつたのだ。それは貴子にしかわからないものであつた。だから二人にわからなかつたのも仕方ないことであつた。

「わかりました。それでは」

役はそれを聞いて応えた。

「まずは延暦寺へ向かひましょう。そしてそこに入ってもらいます」
「わかりました」

「それからですね、まずは」

「だがこれで大きく動くな」

役の目はさらに先を見ていた。

「備えを整えることができる」

「備え、ですか」

「それがまずは何よりも大事だ、今回は特に」

「鬼を倒す為にも」

「そういうことだ。では竜華院さん」

本郷も役も貴子に声をかける。

「参りましょう」

「はい」

貴子もその誘いに応える。

「それでは」

三人は延暦寺に向かつた。そしてその奥にある院の一つに貴子を導き入れたのであつた。そこは古い院であつた。延暦寺は一度織田信長によつて焼き払われているがそれより前にあつたのではないのかと思える程古い建物であつた。だがその中は奇麗に整えられていた。

「こちらですね」

「宜しいでしょうか」

役は貴子に対して言つた。三人は今その院の前にいた。周りには緑の木々が生い茂っている。そこから蝉の声が聞こえてくる。それ

が今は夏であるということ嫌が応にもわからせていた。

「古い院ですが」

「私は別に」

彼女にそれを拒む理由はここでもなかったのであった。

「構いません。どちらであっても」

「わかりました」

「じゃあそれで決まりですね」

本郷も言った。

「話が終わるまで。ここにいてもらいますよ」

「はい」

「何もないところで申し訳ないですが」

「いえ、それは」

「何ならそれでもやりますか？」

本郷はその肩にかけているシヨルダーバッグからふと何かを取り出してきた。

「丁度いい暇潰しになりますよ？」

「それは？」

だが貴子はそれを見て目を丸くさせた。

「ゲームウオッチ…….ではないですよね」

「役さん」

本郷はゲームウオッチという言葉聞いて顔を顰めさせた。そのうえで役に問うてきたのだ。

「まさかとは思いますが」

「あの」

役もそれを受けて貴子に声をかけてきた。

「何でしょうか」

それでも貴子はわかっていないようであった。役は危惧を覚えながらも彼女に尋ねた。

「ゲームボーイアドバンス、御承知でしょうか」

「ええ、ゲームボーイなら」

どうやら名前は知っているようである。

「噂に聞いたことがあります」

「噂、ですか」

「私ゲームはあまりしませんので」

「あまり、ですか」

とてもあまりには思えない言葉ではあったが二人はそれでも頷いた。

「特にここ数年は。遠ざかっておりまして」

「じゃあこれはしませんよね」

「ええ、ゲームウオッチは弱くて」

「だからこれゲームボーイアドバンスなんですけれど」

だが貴子にはそれがわからないらしい。本郷にはそれがとても信じられなかった。

「じゃあいいです」

「はい」

貴子にとっては何が何なのかわからないまま話は終わった。

「それじゃあここで待っていて下さいね」

「わかりました」

「この御札を御身体に付けられて」

役が伝心の札を差し出す。そして貴子に手渡した。

「それだけはしっかりとお願いします」

「さもないと俺達が困りますからね」

「それは承知しています」

ゲームボーイの時とは違って変わってすっかりとした返事が返ってきた。それは本郷も役もわかっていたことなので特に心配はしていなかった。

「では」

「ええ」

「これで」

三人は別れの言葉を交あわせた。貴子が院に入ると役が札を何枚

か取り出しそれを院の要所要所に投げて貼った。それで封印は成ったのであった。

「これでよし、ですね」

「備えはな」

「じゃあ後は俺達の仕事ですね」

「そうだ」

閉じられ、扉が札で封印された院の前で頷き合う。ここで二人の心の中に貴子が声をかけてきた。

『もし』

『貴子さんですね』

まずは本郷がそれに問うた。

『はい』

そしてそれに返事が返って来る。

『聴こえているようですね、私の声が』

『ええ』

『どうやら札が効いているようですね』

役もまた。彼もそれに応えてきた。

『はい、どうやら』

『ならば問題はありません』

『じゃあこれでこのまま行けますね』

『そうだ。では竜華院さん』

『はい』

三人は心の中で話を続ける。顔を見合わせていなくとも三人は話をしていた。

『鬼の場所は』

『昨日と同じです』

『嵐山ですか』

『そうです、その屋敷にいます』

貴子は院の中からそう言った。

『場所は。あちらに着かれたらお知らせ致します』

『わかりました』

『じゃあまずは嵐山に』

『お願いします。まずはそこに行かれないと細かいことはお伝えできませので』

本郷と役は嵐山に向かった。丁度延暦寺との間を往復する形となり嵐山に到着した時には夕方になっていた。二人は嵐山のコンビニで買った弁当とカップラーメンを食べた。それが夕食であった。

第二十二章

『着きましたよ』

本郷が食べたのはカップヌードルのビッグだった。それと炒飯弁当、それにサンドイッチとジュースを食べ終えて満足した声で貴子に話し掛けた。

『そうですね』

『今丁度渡月橋のところですよ』

『そこですか』

『はい、ここからどう行けばいいですか？』

『御髪神社の方ですよ』

貴子は答えた。

『御髪神社ですか』

『そうですね、その近くにあります』

『どんな別邸ですか？』

『和風ですよ』

貴子は答えた。

『屋敷ですよ』

『屋敷』

『そうですね。そこにも花が咲き誇っています』

『四季の花が』

『これだけ言えばおわかりでしょうか』

『いえ、もう少しヒントを』

だが本郷はもっとヒントを要求してきた。

『今のだけじゃちょっとわかりにくいですよ』

『そうですね』

『ええ。何か、他にありませんか。表札とか』

『それでしたら』

貴子はそれに応えてきた。

「門が。赤門です」

「赤門」

「そうですね。朱で塗っています。おそらくそれでおわかりかと」

「表札はないのですね」

「ええ」

貴子はその質問にも答えた。

「隠れて落ち着く為の場所ですので」

「わかりました。それでは」

「朱の門の前まで来たらまた」

「お願いします」

三人は話を止めた。本郷と役は話を終えると顔を見合わせた。

「まずはこれでおおよその場所と特徴はわかりましたね」

「そうだな」

役もそれに頷く。

「まずはこれでよしだ」

「その赤門の奥に鬼がいる」

「用意はいいか、本郷君」

「勿論ですよ」

役の問いに不敵に返す。

「やってやりますよ、今度こそ」

「今度は鬼の考えが読める」

「けれどそれを悟られることなく、ですね」

「そういうことだ。ではな」

「はい」

本郷は頷いた。そして役と二人で御髪神社の方に向かった。そこに辿り着いた時にはもう日は暮れ、夜の帳が嵐山を支配しようとしていた。二人はその中で赤門を探していた。

「赤門は、と」

「こっちな」

役が式神達を受け取って言った。

「こつちの方にあるらしい」

「そつちですか」

本郷は役が指差した方を見た。そこは暗闇の中に消えていく道が一条あるだけであった。

「そつだ」

「見たところ何もなさそうですけれどね」

左右にある筈の邸宅や寺社も闇の中に消えて碌に見えはしない。昼に普通に見える世界とは全く違っていた。そこは夜の世界であった。人の世界ではないのだ。

「だが確かにそこにある」

「わかつてますよ」

実はそれは本郷もわかつていた。

「何かね、感じますから」

「感じているのか？」

「ええ、妖気をね」

笑みが不敵なものになっていた。

嫌になる程。ここまで凄いのは滅多にないですよ」

「そうか、感じるのか」

「役さんは感じませんか？」

「君程ではないがな」

役もそれを感じていないわけではないではないのだ。

「やはり。感じる」

「やっぱりそうですか」

「昨日よりもな」

「ですね」

「考えが読めても。一瞬反応が遅れれば」

「やられるのは俺達です」

「そして竜華院さんもな」

「責任重大ですね」

「だが。それでもいいな」

「今更、ってやつですね」

本郷の笑みは変わらなかった。

「この仕事をはじめから。覚悟は決めていますよ」

「よし、では迷いはないな」

「行きますか」

「ああ」

二人は同時に前に出た。一步闇の中に踏み出す。

そのまま前へ進んでいく。闇は先へ進むごとに深く、暗くなっていく。

だがそれでも二人は先へ進んだ。魔を倒す為に。彼等は前に進むのであった。

妖気は徐々に強くなっていく。やがてそれが二人を退けんばかりにまでなってきた。

「あれだ」

役はすぐ前にある門を指差した。闇の中に赤い門が浮かび上がっている。

「あれですね」

「そうだ、間違いない」

妖気もここで最も強くなっていた。それに貴子の言葉通り赤門である。この二つが何よりの証拠であった。

「あの赤い門だ」

「しかし」

「何だ？」

役は本郷の言葉を目を向けさせた。

「何かあるのか？」

「あの赤ですけど」

「うん」

「あれ、朱じゃないですよ」

「!？」

「朱にしては。やけに生々しい赤じゃないですか。まるで生きてい

るものを使つたみたいに」

「血か」

「多分そうでしょうね」

門を見る本郷の顔が険しくなっていた。

「今までの犠牲者の血だな」

「道理で血が殆ど残っていない筈ですよ」

「門を赤くするのに使うとはな」

「これも。芸術だつて思つてるんでしょうね。とんでもない奴ですよ」

「だが我々は今からそのとんでもない奴の相手をする」

役は門を見据えたまま言った。

「この門を染めている少女達の為にも」

二人は門の前に来た。そしてそこをくぐった。今二人は魔界に入ったのであった。

第二十三章

別邸の中は貴子のいた屋敷とあまり変わらなかった。闇の中に花々が咲き誇り、かぐわしい香りを醸し出しているのがわかる。

「やっぱり色々な花があるみたいですね」

「どうやらな」

二人はそのかぐわしい庭の中を進みながら話していた。

「庭自体は変わらないな」

「ですね」

「だが」

明らかに違う点があった。

「いるぞ、中に」

「どうやら俺達が来ているってこともわかってるみたいですね」

妖気が二人に纏わりついてきていた。その身体を絡め取るうとしているかの様であった。

「この気の動きは」

「だろうな」

それは役も感じていた。

「だが別にどうということはない」

「向こうも隠れる気はないみたいですね」

「その証拠にな」

家の玄関を見据える。

「開けてある。来てくれと言わんばかりだ」

「むしろ来い、って感じですね」

「獲物をか」

「奴から見れば俺達は獲物以外の何でもないでしょう」

不敵な笑みはそのままであった。

「その芸術の為に精々華麗に死んでもらう為の」

「御免こうむりたいものだな、そんな考えは」

「ところが相手はそうは思っちゃいませんよ」

「やれやれだな」

「まあ今更言つても仕方ないですし」

「そうだな」

玄関の前まで来た。

「入るか」

「はい」

開けられたままの玄関の門をくぐった。

「毎度」

本郷が冗談めかして言った。それが合図となつて二人は家に足を踏み入れたのであつた。

妖気はさらに強くなつていた。前に進むのも困難になるかと思える程であつた。身体に纏わりつき、生き物の様に蠢いている。二人はその妖気をあえて意に介さず先に進む。そして広い和室に辿り着いたのであつた。

一体何置あるであろうか。二十では利かない。四方を華麗に描かれた襖で囲い、中には何も置かれてはいない。天井は高く、鳥が自由に飛べる程であつた。二人はその中に入ったのであつた。

薄暗い。だが目が慣れてきたのでそれは苦にはならない。二人はこの広間において鬼が来るのを待っていた。

一言も発しない。ただ、鬼を待っている。それは妖気でわかつた。妖気が次第に大きく、そして不気味になつていくのがわかるからである。

「よくぞ来おつたな」

何処からか鬼の声が聞こえてくる。

「昨夜の二人の男じゃな」

「ああ、そうさ」

その言葉に本郷が答えた。

「鬼退治にな。来てやつたぜ」

「はて、鬼退治とな」

鬼はそれを聞いて嘲笑する声をあげた。

「それはまた面妖なことを申す」

「鬼は退治されるものだけ」

「退治とは強き者が弱き者に対して行うもの」

鬼はそう言つてまた嘲笑した。

「違うかのう」

「何だ？じゃあ俺達が退治出来ないっていつのかい」

「その通りじゃ」

鬼はこう言葉を返した。

「昨夜のことで。わかつておる筈じゃが」

「たまたまこつちが絶不調だったんだよ」

「負けず嫌いはかえつて我が身を滅ぼすぞよ」

「生憎ね、滅らさず口が趣味なんだな」

「左様か。では覚悟はよいのじゃな」

「覚悟も何も言つてるだろ、退治しに来てやつたつて」

「わかつた。では」

前の扉が不意に左右に開いた。そこからあの赤い着物を着た貴子、いや鬼が姿を現わした。白い足袋を履き、手には薙刀を持っている。目は赤く、禍々しく輝き、口からは牙が覗いている。完全に鬼の顔であつた。

「相手をしてやろう。感謝するがいい」

「本郷君」

「ええ」

本郷は役の声に応える。二人は札と刀を抜いてそれぞれ構えた。

「行くぜ、化け物」

「またその様なことを」

化け物という言葉にその禍々しい目を細めた。

「わらわを捕まえて化け物とは」

「顔とかは関係ないんだよ」

「ほう」

「大事なのはやってることなんだ」

本郷は左に動いた。役は右に。すすす、と摺り足で動く。

「手前は。やってることが完全に化け物のそれなんだよ」

「悲しいのう、わらわの美を理解せぬとは」

「理解するつもりはない」

今度は役が言った。

「そしてしようとも思わない」

「無粋よの」

「人を殺めてまで達成しようとするものはもうそれだけで美ではない。魔道だ」

「魔道と言っか」

「そうだ。そして私達はその魔道を止める」

「覚悟しやがれ」

「ではわらわも見せてしんぜよう」

その手がゆらりと動いた。

「美の極致をな。受けるがいい」

手の中に花びらが沸き起こる。それは赤と白の椿の花びらであった。

「行くがいい、花達よ」

鬼の声に応え花びらが舞う。そして本郷と役の周りを覆った。

「めくらましか!？」

「いや、違う」

役にはわかった。

「この香りは」

「何か細工が……クツ」

懐から札を取り出した。赤い札であった。

「させん！」

それを投げると炎となった。それで花びら達を燃やしていく。

「ほう、気付いたようじゃの」

鬼は燃え散る花びら達を見て目を細めていた。

「その花には。毒を仕込んでおつたのじゃ」

「へっ、随分とこすい真似してくれんじゃねえか」

「役さん」

本郷は口と心では別の言葉を話していた。

「わかつている」

役も心の中でそれに応える。

「竜華院さん」

「はい」

本郷の返事に延暦寺の奥から返事が返ってきた。

「読めますか？」

「ええ」

「次は。どう来ますか？」

「棘です」

「棘」

「はい」

「さて」

鬼は今度はその手に薔薇の茎を出してきた。

「わらわはこの花も好きでこのう」

「それで俺達をやるつてのかい」

「左様。受けるがいい」

「上です」

貴子が言った。

「役さんの上です」

「了解です」

役はそれを受けて動いた。上を見上げすぐにそこへ向けて発砲した。

丁度発砲する直前に棘が振り下ろされようとしていた。だが役はそれを銀の銃弾で弾き返したのであった。

「ほっ」

鬼は自身の攻撃を防がれても余裕を見せていた。悠然と目を細め

る。

「やるではないか。今のをかわすとは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

役はそれに一言も返さない。鬼に心を読まれるのを警戒しているのだ。

「さすれば次は」

今度は本郷を見た。だがそれは一瞬であった。

『今度は本郷さんです』

『俺ですか』

『はい、爪です』

『爪』

『来ます、避けて下さい』

『死ねよやっ』

「チイツ！」

貴子の言葉通りであった。爪が来た。鬼が本郷に右手の指を一斉に向けるとそれが急に伸び本郷を刺し貫こうとしてきたのである。

本郷はそれを跳躍でかわした。

「今度は爪かよ！」

「わらわの武器は花だけではない」

鬼は跳んだ本郷に対して言った。

「全てのものが武器なのじゃ」

「へっ」

『また来ます』

『またですか』

『はい、着地の瞬間を狙っています』

本郷は跳躍したままの状態で貴子と話をしていた。跳んでいる僅かな間でも心の中の会話は続く。一瞬の刹那の間に勝利を掴む為に彼は貴子の言葉を聞いていた。

『今度の攻撃は』

『地走りです』

『地走り』

『また花を使った攻撃です、一旦天井へ了解』

本郷は空中で反転した。そして天井を蹴る。

「何とっ！」

鬼は今まさに床に何かを放ったところであった。ついさっきまで本郷が着地する筈の場所に巨大な蠅取草がその禍々しい顎を拡げていた。それで本郷を喰らうつもりであったのだ。

第二十四章

「味な真似してくれんじゃねえか！」

本郷は天井を蹴った。蹴ると同時に鬼へ向かって跳び掛かる。

『今度は薙刀です』

『やっぱりね』

貴子のその言葉に頷いた。

『わかつていたのですか』

『そうした時の為ですからね。役さん』

『うむ』

彼は今度は役と話をした。

『今鬼の注意は俺に集中しています』

『どうやらその様だな』

それは役にもわかった。鬼は今自分に襲い掛かるうとしている本郷を見据えていたからだ。

『今一撃を。奴に悟られないように』

『わかった』

「昨夜のでわからなかったようじゃな」

鬼はその血の色の目を本郷に向けていた。貴子のものである筈の整った顔は今目は目が爛々と燃え上がり、口は耳まで裂け、牙の如き歯が白く不気味な光を放っていた。黒く長い髪は乱れ散っている。

それはまさに鬼の姿そのものであった。まごうかたなき鬼の姿であった。

「わらわに上からの攻撃は詮無きことじゃと」

「生憎俺はものわかりがわるくてね」

本郷はその言葉に対して軽口で返す。

「そう感嘆には諦めないんだよ」

「早死にするの、ぬしは」

「今ここであつてことかい？」

「左様じゃ」

下から何かがやって来た。やはり薙刀であった。

「死ぬがいいわ」

「死ぬのはどつちかな」

「戯言を」

「俺はホラは言うけど戯言なんてのは言わねえ主義でな。その薙刀にしる」

刀を一閃させる。

「これで弾き返すことが出来るんだぜ」

「又ウツ!？」

鬼の薙刀と本郷の刀がぶつかり合った。鋭い金属音が響き、暗闇の中に白銀の光が飛び散る。そしてそこに役の銃弾が迫って来た。

「ウゲツ!？」

「やったか!？」

「これで止めだ!」

「させぬわ!」

本郷の返す刀の横薙ぎの一閃は鬼が姿を消したことによりかわされてしまった。着地した彼を鬼の薙刀が襲う。だが彼はそれはすぐに後ろに跳んでかわした。

「やれやれ、そうそううまくはいかないか」

「迂闊だったわ」

鬼は口から赤い鮮血を吐き出しながら言った。その腹に血を滴り落としていた。

『うつ・・・・・・』

『どうたんたい、貴子さん』

『何でもありません』

貴子は一瞬呻き声をあげたがそれは一瞬のことであった。すぐに元の声に戻った。

『そうかい。ならいいんだがな』

『はい』

「ぬし等が二人おつたのを忘れておつたわ」

「今思い出しただろ」

「そうじゃな。わらわのこの血がぬし等を教えてくれるわ」

鬼は二人は血走った目で見ながら述べる。禍々しさに憎悪が加わっていた。

「最早容赦はせぬ」

鬼は言った。

「そして。ここからは逃がさぬわ」

「!?!」

「これは」

部屋の周りが突如として燃え上がった。何と鬼は部屋の周りに炎を巡らしてきたのだ。

「わらわが死のうともぬし等を殺す」

鬼は憎悪にたぎる声で言った。

「何があるうともな」

「遂にやる気になったってわけかい」

本郷はそれに軽口で返す。だがその顔は笑ってはいない。

「いいのかい？手前だって一歩間違えれば死ぬぜ。いや」

ここで言葉を変えた。

「死ぬのは手前だな」

「さて」

だが鬼はその言葉に当然ながら頷かない。

「わらわが死ぬとは思っておらぬが」

「自分ではな」

本郷はまた言い返した。

「けれどな。実際には違うんだよ」

「面白い。ではわらわの首、取るつもりか」

「最初からそのつもりだ」

「本郷君」

役がここで前に出て来た。

「仕掛けるのだな」

「ええ。援護頼みますね」

「小賢しい」

鬼はまた花をその手に出してきた。

「ならば。わらわもとっておきの毒で今度こそ葬ってくれる」

「今度は何だつてんだ？」

「とりかぶとか」

本郷にはわからなかったが役にはわかった。

「また。強い毒を出してきたな」

「これで覚悟がわかるじやろう」

「嫌になる程な。本郷君」

「わかつてますよ」

役が何を言いたいのかわかっていた。

「じゃあ」

「貴子さん」

表は演技だ。心の中では貴子に問う。

「奴は。あのトリカブトをどうしてきますか」

「投げて来ます」

「投げて」

「はい。槍に変えて」

貴子は答えた。

「それも二本。本郷さんと役さんに」

「そうですね」

「ですから。御気をつけて」

「槍ならよけるのが楽ですね」

「いえ」

だが貴子はそれを否定した。

「あの槍は。普通の槍とは違います」

「毒ですね」

「はい、トリカブトの毒は猛毒です」

彼女は言う。

『おそらくは。放たれ、槍が向けられた時点で貴方達に毒が襲い掛かります』

『そこまですか』

『ですから。絶対に放たさせてはいけません』

その言葉は何時になく真摯なものであった。

『わかりましたね』

『つってももう投げようとしていますますけれどね』

「覚悟はよいな」

鬼は燃え立つ目で二人を見ている。

「この槍を受け、地獄へ行くがいい」

「地獄へ」

「それはまた大袈裟なことだ」

「わらわを本気で怒らせたからじゃ」

「今です」

ここで貴子は言った。

『槍は正面に向かって投げられます』

『正面に』

『そうです。ですから』

『なら』

役はここで黒い札を取り出した。

『今こそこの札を使う時』

『役さん、その札は』

『切り札だ』

本郷の問いに一言で答える。

『これならあの槍も封じることができる』

『とっておきですね』

『そうだ。だが危険だ』

『危険!?!』

『この札は黒いな』

役は心の中で本郷に問う。

第二十五章

『ええ』

『この黒は。闇の黒だ』

『闇の』

『そうだ。全てを包み込み、覆い隠す闇の札だ。これが生み出す闇で槍を吸い込む』

『ブラックホールってわけですか』

『簡単に言つとな。これだけ言えばどれだけ危険なものかわかると思うが』

『確かに』

本郷は心の中で呟いた。

『一步間違えると槍だけではない』

役は心の中で本郷に説明する。

『私も君も。闇の中に飲み込まれてしまう。全てな』

『で、その闇から出られますか？』

『いや』

役の返事は残念なことに予想通りであった。

『生きて出られた者は聞いたことがない』

『やっぱりそうですか』

予想していたとはいえ聞きたくはない言葉であった。本郷は心の中で苦笑いを浮かべるしかなかった。

『じゃあコントロールお願いしますよ』

『やってみる』

落ち着いた自信家の役が何時になく謙虚な返事であった。こうした己の術のことならば常に絶対の自信を持っているというのだ。これがこの札の扱いの難しさを何よりも雄弁に物語っていた。

『だが。もしも時は』

『せめて鬼も一緒にお願ひしますよ』

『本来なら鬼も引き擦り込みたいが』

『無理ですか』

『そこまでコントロール出来ない。少しでも間違えれば終わりだからな』

『わかりました。じゃあ毒の槍で我慢しますよ』

『済まないな』

心の中での話を終えると二人は動きを止めた。鬼はその二人に向けて槍を放つ。

「観念したようじゃな」

二人を見て口を耳まで裂けさせて晒う。槍は手では投げず、妖術で投げてきた。まるでミサイルの様に唸り声をあげて二人に襲い掛かる。

「これで終まいじゃ」

槍を放ち終えてこう言う。鬼はこの時自分の勝利を確信していた。「来たな」

役は札を自分の顔の前で構えた。そして持っている右腕を小さくスイングさせて投げた。忽ち札が黒い空間になった。

「又ッ!？」

「本郷君、その間に」

「了解」

本郷はさつと左に動いた。闇はその間に大きくなっていく。そして毒の槍の前に巨大な闇の壁を作り出していた。

「その闇は」

「すぐにわかる」

答える役の顔に笑みはなかった。その闇を操るのに必死であった。「すぐにな」

「何をするつもりなのじゃ」

「貴様を倒す」

役はそれに答えた。

「その為にも」

槍が闇の中に入った。そしてそのまま入っていく。

「この闇、操ってみせる」

「頼みますよ、役さん」

「ああ」

答えはするが決して油断はしていない。闇を操るのに全ての神経を集中させていた。そんな役の姿を見るのは本郷でも滅多にないことであった。

槍が全て入った。役はそれを見て呟いた。

「よし」

そして全ての神経を闇に集中させる。そのまま闇を封じ込めた。闇が消えた時槍もその中に消えていた。これで鬼の攻撃は消し去ってしまったのであった。

「何と、その為の闇じゃったか」

「そういうことだ」

役は闇を封じ終えて安堵した顔になっていた。

「この闇を操るのはかなり厄介だな」

鬼に対して語る。

「一歩間違えれば私達も飲み込んでしまうものなのだ」

「それを。わらわの槍を消す為に使ったというのか」

「そうだ」

役は言った。

「これでもう槍は使えないだろう」

「くっ」

「あれだけの槍を出して投げるにはかなりの妖力が必要だ」

彼はそれを見抜いていたのだ。

「そして貴様はそれまでにも多くの力を使ってきた。もう残された妖力は僅かだ。違うか」

「例え妖力がなくとも」

だが鬼はそれでも二人を殺すつもりだった。殺気は衰えてはいなかった。

「この刀で。首を刎ねてやろう」

「そうか。ならやってみな」

鬼はその手に持つ薙刀を構えた。そこに本郷が襲い掛かる。

「やれるもんならな」

「ほざけ、人間が」

「本郷さん」

貴子が言ってきた。

「来ます」

「今度は何を仕掛けて来るんだい？まあ薙刀だつてのはわかるけれど」

「足です」

「足か」

「はい」

何故足を狙つて来るのか。本郷にはわかった。薙刀では脛を狙う攻撃があるのだ。その為剣道のそれとは少し違い薙刀の防具は脛当てまである。薙刀があまりにも強いのはそのリーチや振り回す速さだけでなく足を狙うからでもある。その為かなりの剣の達人でも薙刀の相手をするのは困難なのだ。

「一気に薙ぎ払うつもりです」

「そりやまた随分とオーソドックスですね」

「大丈夫ですか？」

「まあね」

貴子を安心させる為にも答えた。

「薙刀ともやり合ったことありますし」

「そうなんですか」

「ええ」

「といつても真剣の相手とはこれがはじめてである。だがそれは黙っていた。」

「とにかく足なんですね」

「そうです」

貴子はまた答えた。

『それから一気に止めをさすつもりです』

『わかりました。それじゃあ』

「覚悟しやれや」

鬼は本郷に紅く、憎悪に燃える目を向けていた。

「これで終いにしてやるからな」

薙刀を振ってきた。貴子の言葉通りであった。今日の前でもう一人の貴子がそれで本郷の足を断ち切らんとしていた。

本郷は跳んだ。駆けながら跳んだ。それで鬼の薙刀を間一髪かわした。

「ナヌツ!？」

「薙刀つてのはな、確かにとんでもなく強いよ」

役は跳びながら鬼に対して言った。

「しかしな、一振りの動きが大きいんだよ。それで弱点もかなりのものなんだよ」

その手に持つている刀が鋭い光を放っていた。部屋の周りを燃え盛る炎の光を受けて紅く輝いていた。その紅は鬼の目に映る紅とは違っていた。純粋な、悪を絶つ紅であった。

「それを衝けば。刀だつて相手が出るんだよ」

刀を突き出した。それで鬼を貫く。刀が鬼の胸を貫いていった。

「ガハアツ」

鬼はそれを受けて大きく血を吐き出した。着物だけでなくその下の畳までも紅に染まる。

「役さん」

「うむっ」

本郷の言葉を受けて役も頷いた。素早く拳銃を放つ。

銀の銃弾もまた鬼を貫いた。その身体が弾ける。それを見るだけで致命傷なのは明らかであった。

本郷は着地した。鬼の身体から刀を抜き後ろに跳ぶ。鬼はその前でゆっくりと身体を床に倒していった。

「やった、か」

「おそろくね」

本郷は役の横に来ていた。そして彼の言葉に応える。

「もう。立ってもいられないみたいですし」

「この事件も終わりか」

「お、おのれ」

だが鬼は立てなくともまだ声は出せた。呪詛に満ちた声を吐き出していた。

「まさか。人間なぞにわらわがやられるとは」

「何言つてやがる」

本郷は燃え盛り続ける部屋の中で鬼に言った。

「ずっと言ってるだろ、鬼ってのは人間に退治される運命なんだよ」

「くっ」

「これでわかっただろ。さっさと観念しやがれってんだ」

「ま、まだじゃ」

だが鬼はそれでも諦めようとはしない。立とうとする。恐るべき執念であった。

「わ、わらわはまだ美を極めてはおらん」

畳の上に腕をつきながら言う。その整った口元からは紅い血が一条滴り落ちていく。

「娘達を堪能し、その身体と花で創り上げる至高の美を。まだ極めてはおらん。極めるまでは」

「そつから先は地獄で追い求めな」

本郷は一言で言い捨てた。

「他人を犠牲にする芸術なんてな、芸術でも美でもねえんだよ」

「う、うぬれ」

鬼はそれに言い返そうとする。だがそれは適わなかった。

「ガハッ」

大きく血を吐いた。それで終わりであった。

「もう何か言うことも無理みてえだな。折角だから今際の際の言葉

も聞きたかったがな」

「だがこれで全ては終わった」

最後に役が言った。

「帰るか」

「火はどうしますか？」

「心配することはない」

「何か術でもあるんですか？」

「術と言えるものではないが」

手の平に氷を作り出ししてきた。

第二十六章

「これで。熱をどけるぞ」

「それで帰るんですね」

「そうだ。鬼はここで全てを焼かれることになく」

「悪を清める浄化の炎つてやつですか」

「この屋敷が燃え落ちた時に全てが終わるだろうな」

「悪が燃え落ちた時にですか」

「そうだ。延焼する前にこちらで手を打つ」

「それなら」

二人は燃え盛る部屋を後にする。既に畳まで燃えようとしていた。鬼はその後ろで紅蓮の業火に包まれていた。二人が屋敷を出た時は屋敷の全てが炎と化していた。彼等はそれを眺めていた。

「この札を使おう」
黒い札であった。だが先程の闇の札とはまた違うものようである。

「水の札ですか？」

「そうだ」

五行思想では水は北、そして黒を表わすのだ。陰陽道は五行思想の影響を強く受けている。だから役が今取り出した水の札も黒の札なのである。

「これで。全てを消す」

「火には水ですか」

「水に勝てる火は存在しない」

役は言った。

「身体を離れて生きられる影がないようにな」

「あの鬼はどの道こうなる運命だったんですね」

「そうだな」

役は答えながら札を投げた。するとそこから忽ち巨大な水飛沫が

上がり火の上に降り注いだ。そして赤い炎を消し去ったのであった。

「これでいい。帰るか」

「はい」

本郷はそれに頷く。

「これで。この事件も終わりですね」

「そうだな」

「今まで犠牲になった女の子は可哀想ですけど」

本郷は闇の中に崩れ落ちていく屋敷を眺めていた。何もかもが崩れ落ちる音が暗闇の中に響き渡る。

「一件落着ですね」

「ああ」

二人は全てが闇の中に消え去った屋敷を見送って姿を消した。後には何も残ってはいなかった。ただ、戦いの後の炎の消えた跡だけが微かに残っていただけであつた。事件は解決したのであつた。

「そうですね、全ては」
二人は翌朝延暦寺にいた。そしてそこで待つていた貴子と会つていた。

「終わったんですね」

「ええ」

「鬼は俺達が退治しましたよ」

二人は延暦寺の山道を降りながら話をしていった。朝のまだ淡い光が苔むした石の道の左右にある緑の草達を照らし出していた。三人はその中を歩いていった。

「一件落着です」

「そうですね」

だが貴子はそれを聞いても暗い顔であつた。

「何かあつたんですか？」

「この事件ですが」

貴子はその暗い顔のまま言った。

「全ては。私の執着から生まれたものですね」

「それは」

「この事件で。私は自分の心の醜さと罪を知りました」

「あれは貴方がやったものではありませんが」

「いえ」

役の言葉に首を横に振る。

「あれが私の影ならば。全ては私がやったことになります」

「しかしあれは」

「だから。私は罪を償おうと思います」

「どうされるおつもりですか？」

役が問う。

「この世を。捨てようと思っています」

即ち出家だ。彼女はそれを考えていた。

「執着を捨て。そして私の影により殺された少女達の菩提を弔い残りの生を送ろうと考えています。それが私が出る罪の償いです」

「そうですね」

「はい。もう迷いはありません」

そこまで決意していた。もう役も本郷もそこに入ることはできなかった。

「ですからこれで」

「わかりました」

役がそれに頷く。

「では。貴方の好きなようにされて下さい」

「はい」

貴子は竜華院の名を捨てた。その美の道も捨て一介の尼僧としてこの世を捨てた。寺の奥深くに籠もりこの事件の犠牲者達の菩提を弔うことになった。それで全ては終わりであった。

「御苦労さん」

事件が終わったのを知った警部は二人を快く迎えた。事務所で大きな笑顔を浮かべている。

「一時はどうなることかと思ったがね」

「まあ何とかね」
それに本郷が応える。
「終わりましたよ」
「何人も犠牲者は出してしまいましたか」
「そうだな。陰惨な事件だった」
警部は役のその言葉に顔を暗くさせた。
「殺し方もな。化け物だけはあつた」
「鬼でしたしね」
「鬼か」
「はい、角のない、人の形をした鬼でした」
「人の影から生まれた」
「あの先生の影だったんだな」
警部も話は聞いていた。
「本当にな。わからないものだ」
上を見上げて言った。
「道への追求が鬼になるとはな」
「どんなことでも一歩間違えればそうなるのですよ」
「そうなのか」
「はい」
役は静かな声で言った。
「一歩間違えればそれで鬼になります」
「それだけで」
「だからこそ恐ろしい」
「何事も」
「人から鬼が生じるのは。簡単なことです」
「それで。大変なことになっちまうんですよ」
「人の中に鬼がいる、か」
「そういうことです」
「よく言われることだが。実際に聞いてみるとな。暗鬱としてしま
うものだ」

「けれどこれで事件は終わりですよ」

本郷は言った。

「何はともあれ一件落着、ってわけです」

「祇園祭までには終わったな」

「まあそうですね」

本郷はそれを言われてようやく祇園祭のことを思い出した。

「で、俺達はこれで暫くはオフです」

「何処かで羽を休めることにしますよ」

「おっと、それはまだ先でもいいんじゃないか？」

「？何かあるんですか？」

「祇園祭だよ」

警部はここでにこやかに笑ってきた。にこやかではあったが含みのある笑みであった。

「何か一つ忘れてないか」

「報酬は振り込んでくれていきますよね」

「それはもうとっくにな」

「じゃあ一体」

「役君にはわかっていると思うが」

「祇園だからですね」

「そう、祇園だからだ」

「!？」

本郷はその話を聞いて首を傾げさせたままであった。彼にはどうしてもわかりはしなかった。

「何なんですか、一体」

「君も京都にいてかなり経っていると思うが」

「それでもわからないものはわからないですよ」

「仕方ないな。鱧だ」

「鱧」

「祇園なのにこれを食べないつもりなのか？無粋な話だ」

「ああ、鱧ですか」

本郷もそれを聞いてようやく頷いた。

「それ、食べないとしてやつですね」

「そういうことだ」

これは京都の習わしの一つであった。祇園祭の時には鱧を食べるのだ。その為祇園祭は通称鱧祭とも言つ。鱧を食べなければ話にならないのだ。

「どうだ。行くかね」

「けど。高いんですよね」

「何の為の報酬なんだ!？」

警部は本郷の言葉を聞いて顔を顰めさせる。

第二十七章

「一千万単位の報酬を。何に使ってるんだ」
「まあ色々」と

実は何に使っているかは彼もよくわかってはいない。気が着いたらかなり減っているのがいつものパターンなのだ。ちなみに役はもつと何に使っているのかわからないのである。

「酒か？女か？風俗でもそんなに使わないが」

「俺は風俗なんですか」

「他に何かあるんだ」

「やれやれ。俺もそんなに女の子には不自由してませんよ」

「どうだか」

「けど、鱧ですよ。高いじゃないですか」

京都の鱧は馬鹿高い。そもそも京都の店自体が高い。京都で美味しいものを食べようと思えば金を出さなくてはならないのだ。それで出て来る料理が味が無い、と怒る者がいればそれは無粋、味がわからぬ田舎者なのだ。ちなみに織田信長も京都の料理を味が無いと酷評している。そもそも尾張の生まれである信長に京の味が合う筈もないのであるが。この時は実は味噌は高価でそんなに大層に使われなかったが尾張、今の名古屋と言えば味噌である。味付けはかなり濃いのである。

「そんなの食べに行っても。それに一見さんは」

「わしがいる」

だが警部は言った。

「だから安心しろ」

「結局警部が行きたいだけじゃないですか」

「ええい、五月蠅い」

遂に開き直ってきた。

「とにかく行くぞ、店は任せろ」

「どうします？ 役さん」

「行くしかないだろうな」

そうは言っても実は役も乗り気であった。

「祇園だからな」

この言葉が何よりの証拠であった。そして席を立つ。

「その店は南座の側ですか？」

「おっ、知ってるのか」

「ええ、大体察しはつきます」

「よし、じゃあ行くか」

「遅れるなよ、本郷君」

「つて、ちよつと」

本郷が言うよりも早く警部も席を立つていた。そして事務所を出ようとする。

「参ったな、俺に選択権ねえのかよ」

「美味い鰻が食えるな」

「ですね」

警部と役はそんな本郷をよこに楽しそうな顔で話をしている。

「やはり夏は鰻だ」

「はい」

「仕事が終わって一件落着いたところだな」

「そしてその後は」

「どうするつもりかね？」

「祇園なんでしょ？」

やっと追いついたかのように本郷が後ろからやって来た。今三人は玄関を出ようとしている。

「じゃあ。舞妓さんと一緒に一杯やりましょうよ」

「悪くないな」

「では行くか」

「はい」

三人は玄関を後にした。そしてその足で鰻を食べに向かう。暑い

夏の京都。そこでの戦いを終えた本郷と役のささやかな勝利の祝いでもあった。

京に舞う鬼 完

2006・7・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3466f/>

京に舞う鬼

2010年10月8日13時32分発行